

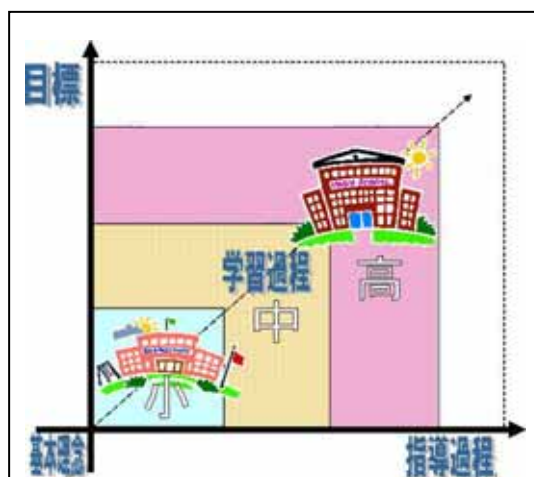
# 小・中・高等学校における学校英語教育の 連携の在り方とその一貫性にかかわる研究 - 連携カリキュラムの作成を模索して -

研修研究部カリキュラム開発課  
(外国語教育)

## 研究の概要

平成 15・16・17 年度の 3 年間にわたって実施した学校英語教育に関する研究を報告する。これまで、学校英語教育は様々なアプローチによりその改善が試みられてきたが、21 世紀に入ってさらに社会のグローバル化が進行する中、「英語」そのものの必要性や重要性も、ますます高まっている。この状況に合わせ、国の言語政策「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」及びその「行動計画」のもと、小学校の英語活動やスーパー・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)、英語教員研修など、幅広く具体的な取組が全国各地で繰り広げられている。

このような状況を踏まえ、本研究では、より良い学校英語教育の実践に向けた異校種間連携を効果的に図るための方策を探ることとし、国内外の文献研究等を行うとともに、県内中学校・高等学校の英語教員を対象としたアンケート調査を行った。また、共生の時代に国際社会で生きる日本人として必要とされる資質やコミュニケーション能力の育成を主眼とした校種を越えた連携を、“小・中・高 12 年間”という長いスパンにおいて、どのように効果的に行うかという課題に取り組み、小・中・高での一貫した指導が可能となる「連携カリキュラム(試案)」を作成するとともに、研究協力員との授業実践を行い、その有効性を確認した。



を確認した。

キーワード：  
態度や資質の育成と語学  
国際理解  
コミュニケーション能力  
学習者主体  
学ぶ中身の一貫性  
基本理念と目標の共有  
校種を越えた連携

## 目次

研究の目的と主題設定理由	69
1 目的	69
2 主題設定理由	69
研究の期間及び方法	70
1 研究期間	70
2 研究方法	70
(1) 平成 15 年度(第 1 年次)	70
(2) 平成 16 年度(第 2 年次)・平成 17 年度(第 3 年次)	70
研究の内容	70
1 英語教育を取り巻く状況と本研究とのかかわり	70
2 英語教員へのアンケート調査	71
(1) 調査概要	72
(2) 回収結果	72
3 小・中・高等学校における「連携カリキュラム(試案)」	76
(1) 作成上の具体的な視点や考え方	76
(2) 「連携カリキュラム(試案)」とその主な特徴	77
4 実践事例報告	80
(1) 協力実践事例 - 小学校段階(掛川市立和田岡小学校)	80
(2) 協力実践事例 - 中学校段階(掛川市立桜が丘中学校)	82
(3) 協力実践事例 - 高等学校段階(静岡県立掛川東高等学校)	84
(4) 実践協力 ALT のまとめと考察(授業者)	86
(5) 授業実践の全体像と児童生徒の反応や実態	86
研究のまとめ	89
【参考文献等】	91
【研究組織】	91
【研究顧問による特別寄稿】	92
「英語教育の異校種間連携の意義について」 静岡大学教育学部教授 白畑知彦	

# 小・中・高等学校における学校英語教育の 連携の在り方とその一貫性にかかわる研究

- 連携カリキュラムの作成を模索して -

研修研究部カリキュラム開発課  
(外国語教育)

## 研究の目的と主題設定理由

### 1 目的

小学校での英語教育が急速な広がりを見せる中、今後、小学校、中学校、高等学校での英語教育を効果的につなげていくことが「英語が使える日本人」(文部科学省平成 14 年 7 月)育成のための「行動計画」実践の一助となると考え、本課担当による前研究「小学校における英語学習活動に関する研究」(2 年計画)に積み上げる形で一貫性のある学校英語教育の在り方を探るとともに、「連携カリキュラム(試案)」を作成することで、学ぶ内容に焦点をあてた効果的な連携の具体化を図る。

### 2 主題設定理由

理由は主に次の 4 点である。従来の英語教育の連携における課題解決の糸口を見つけ、公立小学校における英語の台頭に伴う対応も含めて、日本の英語教育において具体的かつ明確な目標設定が見えにくい状況への対応と「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」に対する地方からの発信を試みたいとの考えに立つものである。

これまで義務教育課程の中学校の英語教育とその後の高等学校の英語教育がなかなか効果的につながらず、お互いがお互いをあまりにも知らない状態が続いてきた。個々の教員がそれぞれより良いものを求めて実践しても、3 年間という期間や制約を受けた時間数の中での実践には限界があった。また、異動で担当教員が途中で代わることによる影響や入試の準備等を理由になかなか思うように指導の一貫性を保って進めていくことが難しいという声が教員間でも多々存在した。

さらに、中高の段階を見ただけでもなかなか効果的につながりにくい状況があるところへ、平成 14 年度(2002 年)から公立小学校でも英語を扱うことが可能な時代に入り、全国的にも県内を見ても多様な英語活動や国際理解教育への取組が小学校で実施されるようになった。そのため、異校種での英語のつながりは、今まで以上に複雑化が進んでいる。

こうした状況の中、「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」(平成 14 年 7 月)及びその「行動計画」(平成 15 年 3 月)で、日本人としてどのような英語力が求められ、どの程度までコミュニケーション能力を身に付けたいか、数値目標として明記されて 3 年を迎える。現在、国の抜本的改革の一つとしてのこのような包括的な言語政策は、それぞれの分野で挑戦が続くが、まだ、走り出して数年であり、結果の見えにくい段階にあるからこそ、様々な取組による報告が意味をなすものとする。

## 研究の期間及び方法

### 1 研究期間

平成 15 年度から平成 17 年度(3 年間)

### 2 研究方法

#### (1) 平成 15 年度(第 1 年次)

調査訪問、国内外の英語教育に関する文献研究・資料収集等を通して、小・中・高等学校の一貫性のあるカリキュラム作成を視野に入れた事例研究と試案作成を行う。

ア 小中高連携先進地区や先進的实践校への調査訪問

イ 英語教員の学校英語教育に関するアンケート調査

ウ 文献研究・資料収集

エ 「連携カリキュラム(試案)」作成

#### (2) 平成 16 年度(第 2 年次)・平成 17 年度(第 3 年次)

「連携カリキュラム(試案)」の検討と分析及び見直しを多角的に行い、インターネット・ウェブ上で、開発した内容を具体的に閲覧できるようにまとめる。

ア 小中高連携先進地区や先進的实践校への調査訪問

イ 英語教員の学校英語教育に関するアンケート調査

ウ 文献研究・資料収集

エ 「連携カリキュラム(試案)」の検討と分析及び見直し

オ 研究協力員との授業実践(小・中・高等学校段階)(第 1 期:平成 16 年 11・12 月、第 2 期:平成 17 年 1・2 月、第 3 期:平成 17 年 5・6 月、第 4 期:平成 17 年 10・11 月、ただし、中学校段階は第 2 期より実施)及び児童生徒の事後評価

カ 授業実践校での中高生の実態把握

キ インターネット・ウェブ上での閲覧可能な資料・データ等の整理と準備及び作成

## 研究の内容

### 1 英語教育を取り巻く状況と本研究とのかかわり

「英語が使える日本人」の育成という表現が使われる背景には、多くの日本人にとって、何年学んでもなかなか思うように英語でコミュニケーションをとることができないという共通の思いがあることは否めない。ただし、現実的に考えて、日常あふれていて否応なしに使用を求められる言語とは異なり、日本人にとってやはり外国語としての「英語」である。そのため、国際語としての「英語」の重要性や必要性は認識していても、もう一つ別の言語を身に付けるにはかなりの時間と忍耐力や労力の積み上げが必要となる。

英語の力は、継続の中で培われるが、その基礎力養成に最も影響力を与えるのは学校英語教育と言える。しかし、校種が異なることによって学ぶ内容や形態及び指導法等が変化し、学習者の学習プロセスの一貫性を妨げることが往々にして起こる。私立では系列学校での連携は公立に比べて取りやすいが、公立では上級学校へ行くに連れ、内容レベルも英語の取り扱い方も多様化するため、なおさら一貫した形を取るのは困難である。また、前述の「行動計画」の中で明らかにされたどの程度までの英語力が求められるかという数値主体の目標では、学習者本人の資格目標にはなっても、指導者たちの継続一貫した指導体制にはつながりにくい。

効果的な連携方法の在り方をめぐって、近年の全国的な傾向として小中、中高、幼小中、小中高、小中高大など、併設型や連携型あるいは中等教育学校とそれぞれ異なる形態を持

った一貫校の構想が広がり、市教委や県教委レベルで様々な取組が模索されている。このような中で本研究が目指す公教育での小中高連携に焦点を当てた取組は、極めて少ない。その中で、千葉県成田市の研究地区は、「チバ・インターナショナル・エデュケーション・プラン(CIEP)」(2002年)という県の施策を受け、英語の実践的コミュニケーション能力の伸長と将来国際的に活躍できる人材の育成を目標とした小中高一貫でのカリキュラム体系を目指している。小学校英語の実践はもとより、小中一貫の評価規準の作成や会話表現を中心とした小中の言語材料の系統化などが進み、高校は多様な選択授業で新しい動きへの対応を考え、併せて、小中から依頼があれば高校教員の出前授業を実施し、校種を越えた支援や連携の姿を研究・実践しているとのことである。

静岡県内でも、公立小学校での英語活動は平成17年度で92.5%の実施が報告されている。ただし、全国的な傾向と同様、実践の形、指導者、時間数及び内容もそれぞれ異なる。中学校の前倒し的な小学校段階での英語の実践も見られる中、本研究は小学校段階からの新たな動きに対応し、小学校での学びを上級学校で受け継いで伸ばしていくことを主眼に実践を考えた。これは、本研究前に平成13・14年度、国際研修課(平成16年度の当センター組織改編により現カリキュラム開発課外国語教育担当)が小学校英語に関する研究を実施してきたからでもある。

さらに、海外に目を向ければ、諸外国で日本同様、自国の課題解決に向けて教育改革が行われている。例えば、1990年代に活発化した米国の初等中等教育改革で策定された「教育スタンダード」は、国の教育法を受け、各州が「州教育改善計画」として教育内容の基準化・共通化

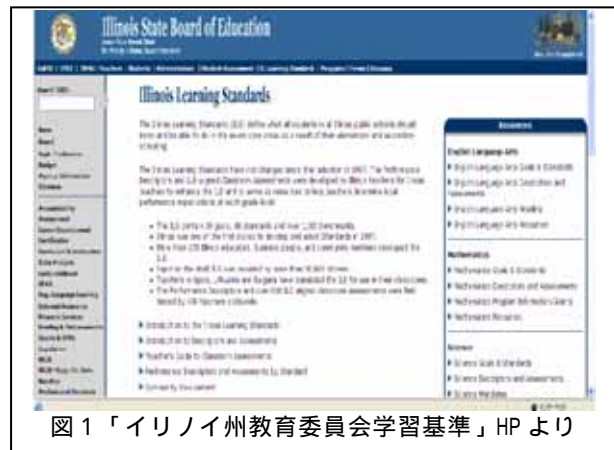


図1 「イリノイ州教育委員会学習基準」HPより

を図るために明確な教育内容及び目標等を設定し、指導と評価が一体をなすものである。図1は、イリノイ州の例だが、「学習基準(Learning Standards)」としてどの段階の生徒がどのようなレベルに達することが望ましいかについての全体像及び教員として何をなすべきが見えやすく、誰もが見られるようにインターネット・ウェブ上で公開されている。特に日本の英語教育の場合は、具体的にどの程度できればどの到達レベルにあるかなどの明確なレベル設定がないため、段階的に力を伸ばしていくための具体策を考えていく際、このような基準に関する各国の資料は参考になる。

忘れてならないことは、「英語が使える」ためには単に言語学習にとどまらず、コミュニケーションを成立させるために必要な態度や資質と語学の技能・知識のバランスがとれた力が求められるということである。そのため、語学教育と国際理解教育の視点を踏まえた学校英語教育の連携を視野に入れ、具体化を図ることが大切となる。

## 2 英語教員へのアンケート調査

平成15年度(2003年)から平成17年度(2005年)に、年度ごと、静岡県の英語教員を対象として学校英語教育に関するアンケート調査を実施した。ここでは、本研究とかかわりの深い項目を中心に、調査結果の一部を報告する。

## (1) 調査概要

### ア 調査目的

学校英語教育の現状と中高の英語教員の英語教育全般やカリキュラムに関する意識を継続的に調査し把握することで、学校英語教育の効果的な連携に向けた取組への足がかりとする。

### イ 調査方法及び調査の時期

静岡県「英語教員の資質向上のための研修」(全国5年間約6万人の「英語教員研修」の静岡版)参加者に質問紙調査を依頼し、「事前研修(5月)」で配布、「集中研修(7月)」で回収する。

### ウ 調査対象及び対象数

静岡県「英語教員の資質向上のための研修」参加者  
(内訳：中学校・高等学校・盲・聾・養護学校の英語教員 2003年200人 2004年200人  
2005年195人 <これは、静岡県の全英語教員の約2分の1にあたる。>)

### エ 調査項目

8項目(本報告では内3項目を掲載し、残りはインターネット・ウェブ上で公開する予定)

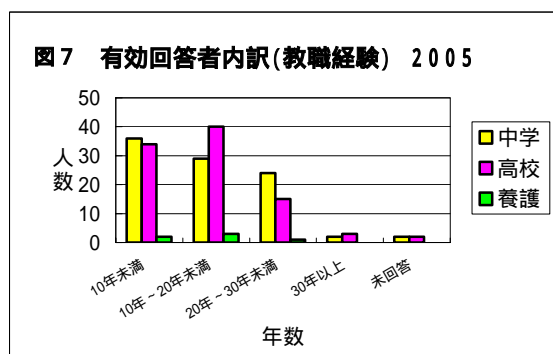
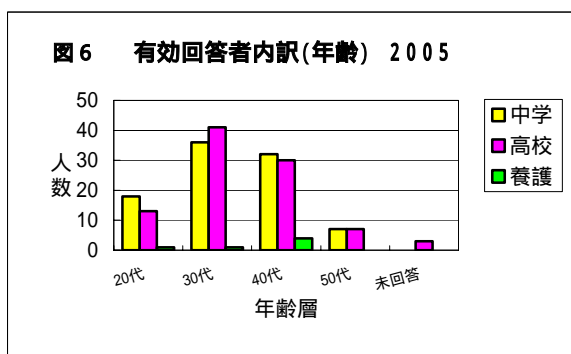
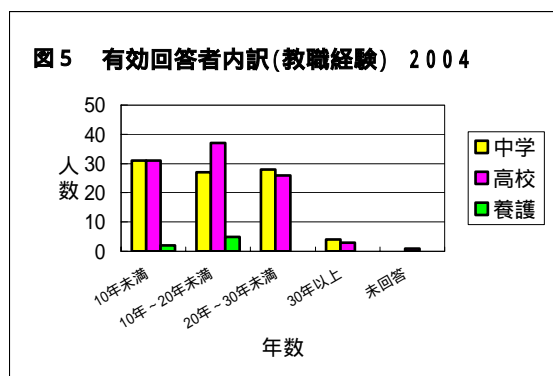
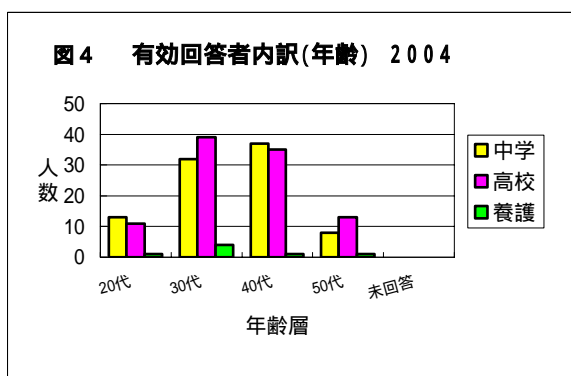
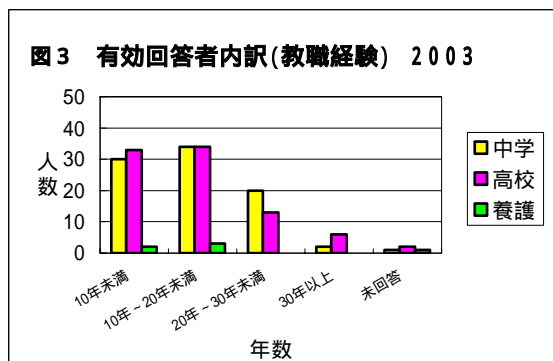
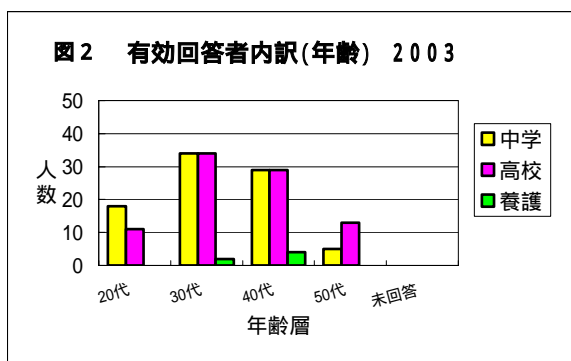
## (2) 回収結果

### ア 有効回答人数

2003年181人(内訳：中学87、高校88、養護6) 2004年195人(内訳：中学90、高校98、養護7) 2005年193人(内訳：中学93、高校94、養護6)

### イ 回答者の特性

男女比は、2003年 男性89人、女性90人、不明2人 2004年 男性96人、女性99人  
2005年 男性72人、女性120人、不明1人。年齢層と経験年齢は各校種、図のとおり。



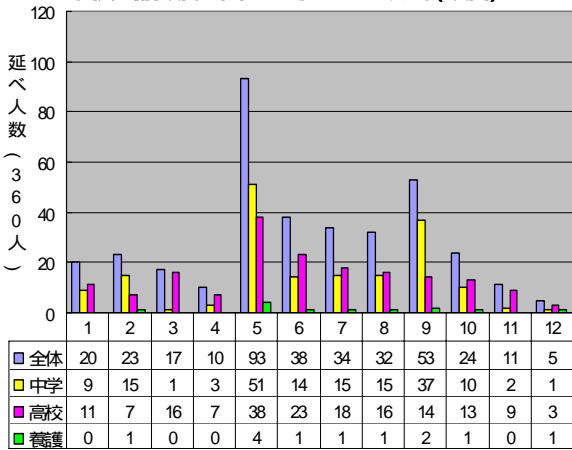


ウ 回答結果及び考察（次の質問1～3に関して3年度分を併記）

**質問 1**：学校英語教育に関して、現在、あなた自身が関心を寄せている分野は何か、特に関心の強いもの（順に1～2番目まで）を教えてください。

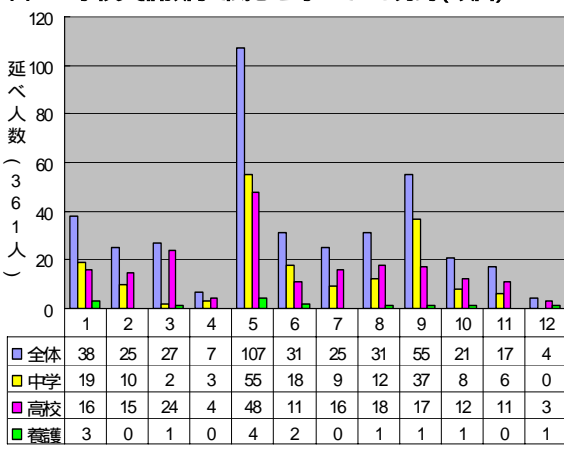
- |                 |                 |                   |
|-----------------|-----------------|-------------------|
| 1) 小学校段階からの英語教育 | 2) 中学校での英語の学習内容 | 3) 高等学校での英語の学習内容  |
| 4) 校種間の英語教育の連携  | 5) 授業研究・改善・指導法  | 6) 教材・カリキュラム開発    |
| 7) 入試制度・入試問題    | 8) 学習集団・規模・形態   | 9) 評価方法・評価基準・評価規準 |
| 10) 英語教員の研修     | 11) 国の施策・方針     | 12) その他           |

図8 学校英語教育で関心を寄せている分野(項目)2003



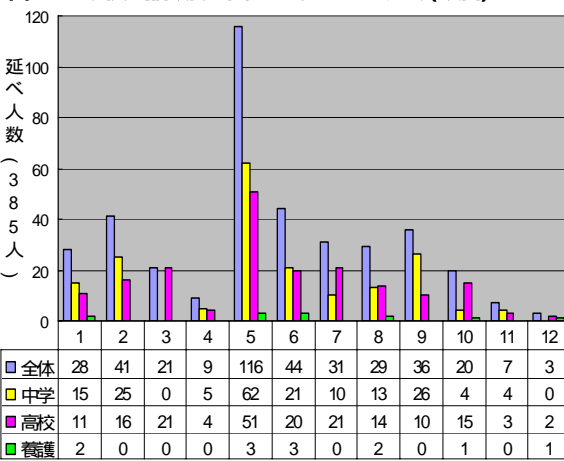
平成15年度(2003年)調査対象者の全体として学校英語教育で最も関心の高い分野は、「5) 授業研究・改善・指導法」93人(25.8%)で、次は「9) 評価方法・評価基準・評価規準」53人(14.7%)であった。中学でも同様の傾向が見られ、51人(29.5%)が「5) 授業研究・改善・指導法」で、37人(21.4%)が「9) 評価方法・評価基準・評価規準」を選択している。一方、高校で最も関心の高い分野は「5) 授業研究・改善・指導法」38人(21.7%)で同じだが、次は「6) 教材・カリキュラム開発」23人(13.1%)であった。中学の2項目集中型とは異なり、2位以下は様に関心が分散している。「9) 評価方法・評価基準・評価規準」は、中学と高校の関心の高さの差が最もある。養護は、「5) 授業研究・改善・指導法」が4人(33.3%)と最も高く、高校と同様の傾向にある。

図9 学校英語教育で関心を寄せている分野(項目)2004



平成16年度(2004年)調査対象者にとって、全体として学校英語教育で最も関心の高い分野は、前年度同様、「5) 授業研究・改善・指導法」が107人(27.6%)で、次に「9) 評価方法・評価基準・評価規準」が55人(14.2%)であった。興味深いのが、3番目に高い「1) 小学校段階からの英語教育」38人(9.8%)で、前年のほぼ倍近くの人数となった。中学は、「5) 授業研究・改善・指導法」が55人(30.7%)と最も高く、次に37人(20.7%)で「9) 評価方法・評価基準・評価規準」が高い。「1) 小学校段階からの英語教育」選択者が前年度と比較して倍以上に増え、若干全体に影響を与えている。高校は、「5) 授業研究・改善・指導法」が48人(24.6%)で最も高く、次が「3) 高等学校での英語の学習内容」24人(12.3%)となっている。養護は、中高同様に「5) 授業研究・改善・指導法」が4人(28.6%)と高いが、次が「1) 小学校段階からの英語教育」3人(21.4%)であった。

図10 学校英語教育で関心を寄せている分野(項目)2005

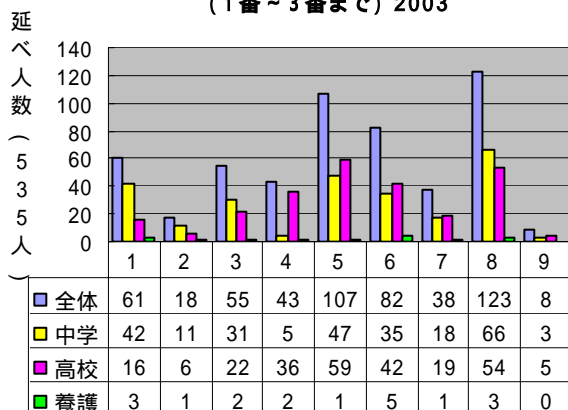


平成17年度(2005年)調査対象者にとって、全体として学校英語教育で最も関心の高い分野は、3年連続の「5) 授業研究・改善・指導法」の116人(30.1%)で、人数・割合ともに増加傾向にある。次が「6) 教材・カリキュラム開発」の44人(11.4%)、「2) 中学校での英語の学習内容」の41人(10.6%)と続く。中学は、「5) 授業研究・改善・指導法」の62人(33.5%)が最も高く、次が「9) 評価方法・評価基準・評価規準」26人(14.1%)、「2) 中学校での英語の学習内容」25人(13.5%)の順でこれまでの2点集中傾向が影をひそめた。また、「3) 高等学校での英語の学習内容」は0人(0%)だった。高校は、3年間ともほぼ同様の傾向を示し、「5) 授業研究・改善・指導法」51人(27.1%)が最も高く、他の分野に関しては分散した関心を示した。養護も例年同様、様に関心の幅がある。

**質問2**：あなたの担当する「英語」の授業の年間計画に最も影響を与えているものは何か（順に1～3番目まで）教えてください。

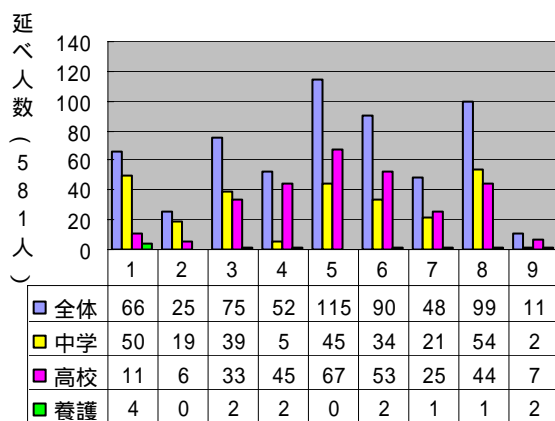
- 1) 学習指導要領    2) 県や地域の方針・意向    3) 学校全体で決定した方針・意向  
 4) 学年中心で決定した方針・意向    5) 英語科で決定した方針・意向  
 6) 担当として個人で決定したもの    7) 生徒の要望・意向    8) 教科書の流れ    9) その他

**図11 英語の年間計画に最も影響を与えているもの（1番～3番まで）2003**



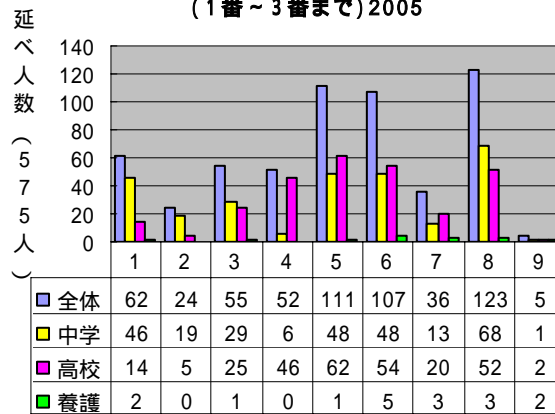
平成15年度(2003年)調査対象者の全体における「英語」の授業の年間計画に最も影響を与えているものは、「8)教科書の流れ」123人(23.0%)が最も多く、次は「5)英語科で決定した方針・意向」の107人(20.0%)で、「6)担当として個人で決定したもの」82人(15.3%)と続いた。中学では「8)教科書の流れ」66人(25.6%)、「5)英語科で決定した方針・意向」47人(18.2%)、「1)学習指導要領」42人(16.3%)の順である。高校は、「5)英語科で決定した方針・意向」が59人(22.8%)、「8)教科書の流れ」54人(20.8%)、「6)担当として個人で決定したもの」42人(16.2%)と続く。養護は、「6)担当として個人で決定したもの」5人(27.8%)が最も多く、次に「1)学習指導要領」と「8)教科書の流れ」が同数の3人(16.7%)であった。特徴的なのが、高校では「4)学年中心で決定した方針・意向」が36人(13.9%)に対し、中学は5人(1.9%)と顕著な違いがあった。

**図12 英語の年間計画に最も影響を与えているもの（1番～3番まで）2004**



平成16年度(2004年)調査対象者の全体における「英語」の授業の年間計画に最も影響を与えているものは、「5)英語科で決定した方針・意向」が115人(19.8%)で最も多く、次に「8)教科書の流れ」99人(17.0%)、「6)担当として個人で決定したもの」90人(15.5%)となった。中学は、「8)教科書の流れ」54人(20.1%)、「1)学習指導要領」50人(18.6%)、「5)英語科で決定した方針・意向」45人(16.7%)の順で、2位・3位の入替はあるが前年度と大きな違いは見られない。高校は、「5)英語科で決定した方針・意向」が67人(23.0%)で、「6)担当として個人で決定したもの」53人(18.2%)、「4)学年中心で決定した方針・意向」45人(15.5%)、さらに、ほぼ同数で「8)教科書の流れ」44人(15.1%)と続いた。養護は、「1)学習指導要領」が最も多く4人(28.6%)で、後は同等程度で分散している。全体としては若干、「3)学校全体で決定した方針・意向」が75人(12.9%)と人数的に増加している。

**図13 英語の年間計画に最も影響を与えているもの（1番～3番まで）2005**



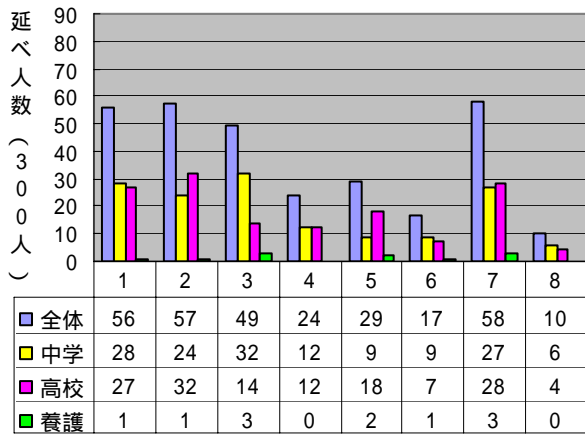
平成17年度(2005年)調査対象者の全体における「英語」の授業の年間計画に最も影響を与えているものは、「8)教科書の流れ」で123人(21.4%)、「5)英語科で決定した方針・意向」111人(19.3%)、「6)担当として個人で決定したもの」107人(18.6%)と続き、中高ともに上位3位までに入る項目が同じであった。中学は、「8)教科書の流れ」68人(24.5%)、「5)英語科で決定した方針・意向」と「6)担当として個人で決定したもの」が同数で48人(17.3%)、ほぼ近い値で「1)学習指導要領」46人(16.5%)が続く。高校は、「5)英語科で決定した方針・意向」62人(22.1%)、「6)担当として個人で決定したもの」54人(19.3%)、「8)教科書の流れ」が52人(18.6%)で、これまで同様、中学と極端に異なる項目「4)学年中心で決定した方針・意向」が46人(16.4%)と続く。養護は、個々の生徒への対応が求められ、「6)担当として個人で決定したもの」が5人(29.4%)と最も多くなっている。



**質問3** : あなたは小・中・高の英語教育の連携のためにどのような方策が効果的と考えるか、あなたの考えに最も近いものを2つ選び、教えてください。

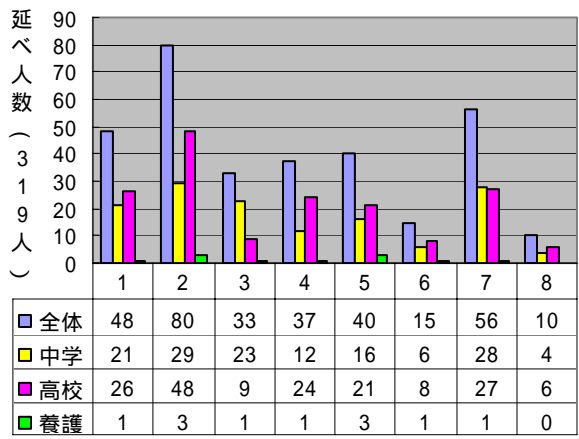
- 1) 校種間の連絡協議会
- 2) 誰でも参観可能な「公開授業」の実施
- 3) 教師の校種を越えた「出前授業」の実施
- 4) 公的機関主催の研修会,研究会,講習会等での研修
- 5) 民間や研究団体主催の研修会,研究会,講習会等への参加と情報収集
- 6) 校種を越えた生徒たち同士の交流
- 7) 校種を越えた小中、中高及び小中高の連携が可能になるカリキュラムの構築
- 8) その他

図14 小中高の英語教育連携への方策案(2003)



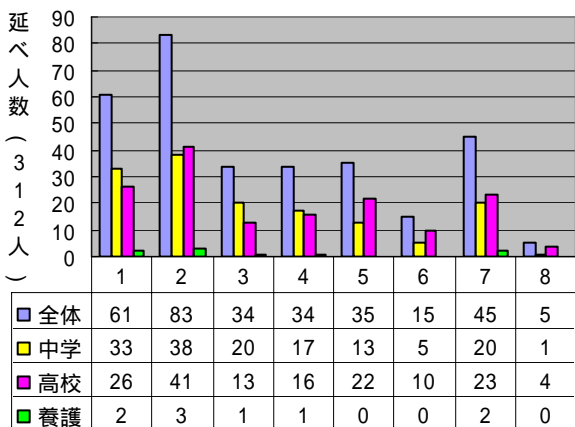
平成15年度(2003年)調査対象者全体の小・中・高の英語教育の連携のために効果的な方策として最も多かった意見は、「7)校種を越えた小中、中高及び小中高の連携が可能になるカリキュラムの構築」58人(19.3%)であった。僅差で「2)誰でも参観可能な『公開授業』の実施」57人(19.0%)、「1)校種間の連絡協議会」56人(18.7%)と続き、「3)教師の校種を越えた『出前授業』の実施」49人(16.3%)の順で多かった。養護は対象者人数が少ないこともあって意見が分散するが、中高の教員の選択に特に違いがある部分としては、「3)教師の校種を越えた『出前授業』の実施」が32人(21.8%)と最も多かった中学に対して、高校は8項目中5位14人(9.9%)であった。また、逆に「5)民間や研究団体主催の研修会,研究会,講習会等への参加と情報収集」が中学9人(6.1%)と高校18人(12.7%)とでは割合に差があった。

図15 小中高の英語教育連携への方策案(2004)



平成16年度(2004年)調査対象者全体の小・中・高の英語教育の連携のために効果的な方策として最も高かった意見は、「2)誰でも参観可能な『公開授業』の実施」80人(25.1%)で、前年度の集団が一様に「1)」、「2)」、「3)」、「7)」の項目に対して意見が高かったことと比べると、当該年度は少し意見が異なる。特に、「2)誰でも参観可能な『公開授業』の実施」が伸び、中学にあまり変化は見られないが、高校が前年度32人(21.8%)から当該年度は48人(28.4%)が選択して増加した。一方、「3)教師の校種を越えた『出前授業』の実施」の全体が減少し、33人(10.3%)となった。なお、「1)校種間の連絡協議会」48人(15.0%)と「7)校種を越えた小中、中高及び小中高の連携が可能になるカリキュラムの構築」56人(17.6%)は、前年度同様、多くの教員が選択し、全体で2位・3位の位置を占める意見となっている。

図16 小中高の英語教育連携への方策案(2005)



平成17年度(2005年)調査対象者全体の小・中・高の英語教育の連携のために効果的な方策として最も高かった意見は、「2)誰でも参観可能な『公開授業』の実施」で83人(26.6%)、次に「1)校種間の連絡協議会」61人(19.6%)、さらに「7)校種を越えた小中、中高及び小中高の連携が可能になるカリキュラムの構築」45人(14.4%)と続き、前年度とほぼ同様の傾向を持つものだった。同様の傾向を持ちながらも、少し特徴的な部分は、「2)誰でも参観可能な『公開授業』の実施」が中学38人(25.9%)、高校41人(26.5%)、(参考:養護3人(33.3%))と選択されており、ある特定校種に限った特徴的な意見ではないことがうかがえる。

全体を通して、毎年意見の多かったものの内、「7)校種を越えた小中、中高及び小中高の連携が可能になるカリキュラムの構築」以外は、これまで規模の差こそあれ、ある程度異校種間の多くの場で実践されてきた連携の姿である。

### 3 小・中・高等学校における「連携カリキュラム（試案）」

#### (1) 作成上の具体的な視点や考え方

「初等中等教育における国際教育推進検討会報告 ～国際社会を生きる人材を育成するために～（平成17年8月3日）」第3章「国際教育の充実のための具体的方策」の中で「外国語教育の充実」として、以下のように述べられている。

英語をはじめとした外国語運用能力については、コミュニケーションの手段として国際社会で実際に通用するよう、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の能力をバランス良く育成していくことが重要である。

また、外国語教育は、単に言語運用能力の習得だけを目的とするのではなく、異なる文化や言語を持つ人々とコミュニケーションという主体的な活動を通じて、自分の考えを持ち、それを主張する中で合意を形成していくという態度・能力の育成にも直接的に寄与するものでもある。子供たちの主体的な活動への参加が促されるよう、子供たちの発達段階を踏まえた話題、題材、素材を扱うなどの工夫が必要である。

文化の異なる人々と対話を通して豊かな人間関係を構築するには、伝達手段としての言語だけではなく、国や自己の在り方と不可分の関係にある言語を理解することが不可欠である。国の姿や文化を映す鏡としての言語の重要性に対して認識を深めることも大切である。

上記の指摘は、今回試案として作成したカリキュラムの根底に流れる考え方と近似する。当センターでは平成8年度から国際理解教育に関する研究を続けてきている。1974年の「ユネスコ『教育勧告』」を受け、各国で教育実践が進む中、国際理解教育の歴史はまだ30年余とさほど長くない。我が国でも様々な実践が行われてきているが、社会のグローバル化が進む中、学校現場でよりわかりやすく実践しやすい姿を模索して、中心理念の柱を「自己理解」「他者理解」「相互関係理解」「コミュニケーション能力」と置いて国際理解教育の理念及びその学習内容や実践への道筋を紹介してきた。そこへ、学習指導要領に示されたように英語が小学校の「総合的な学習の時間」の中で「国際理解」の一環として扱うこともできるという方向性が打ち出された。今後、小学校で扱われる英語に関しては、さらに進んだ国の方向性が明らかにされる模様だが、教育理念として大切にしたい部分、つまり、何のために行うのかという部分が大きく変わることはないと考え

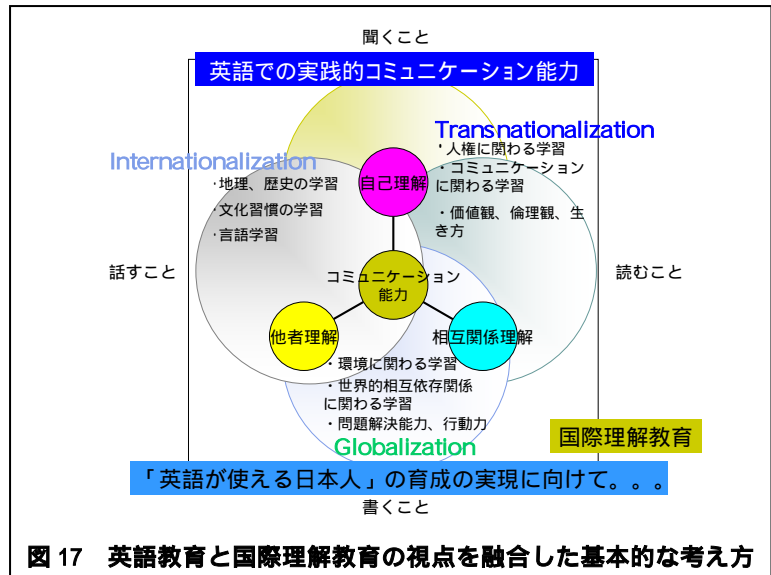


図17 英語教育と国際理解教育の視点を融合した基本的な考え方

え、その後につながる英語教育との効果的かつ有機的な連携を視野に、図17のような考え方で「連携カリキュラム（試案）」の作成を行った。

教育実践は「どんな子供たちを育てたいか、どういう力をつけたいか」がスタート地点であり、さらにこれまで存在していた中学校や高等学校での英語教育や国際理解教育の実践が一貫した方向を持つことで線となり面をなすと考える。これまでの学校英語教育の主たる連携のアプローチは先に紹介した「英語教員へのアンケート調査」でも少し

触れたが、(1)近隣やある特定地域での学校間連携、(2)教員の校種間移動、(3)連絡協議会、研究会等での情報交換、(4)生徒たちの直接交流や体験的共同作業等といった『人』が動くことで対応するものが多かった。これは、今後も活発化すべきものであり、また実際に活発化しているところだが、『学ぶ中身の一貫性』を目指す取組にはあまり手をつけてこなかったことも指摘できる。こうしたことから、国際理解教育の視点を軸足に、コミュニケーションに必要な態度や資質の育成と語学としての知識や技能の習得を関連付け、学ぶ中身の一貫性とその共有化をより具体的な形で図ることで、小・中・高の連携を一層推し進めることができると考えた。この考え方は、「静岡県版カリキュラム英語科」にも反映されているものである。

## (2) 「連携カリキュラム（試案）」とその主な特徴

次のページに、「連携カリキュラム（試案）」を紹介する。試案の主な特徴は、次のとおりである。

小中高 12 年間で 5 つのステージに分け、それぞれの段階における到達目標を設定  
12 年間のステージ分割においては 4・4・4（2・2）が理想であったが、各校種における入試対応の状況や現場のより現実的な姿を勘案して、実践可能なものとするために経験知により区切り分けを行った。また、異校種が同じステージ・ゴール（到達目標）を共有することで、自然に連携が図られることを想定し、そのため意識的に「ステージ 3」と「ステージ 4」は校種をまたいで設定されている。

国際理解教育の視点（態度や資質を育成する視点）と活動例を中心に体系化

国際理解教育（「自己理解」「他者理解」「相互関係理解」「コミュニケーション」にかかわる態度や資質の育成）の視点から、ステージごとにテーマ（例）に基づいて設定した活動例を紹介した。ここに紹介した活動例は実践可能なものであり、学習計画の中にバランスよく組み入れることが望まれる。また、「総合的な学習の時間」や「外国語（英語）」の授業の一部を利用して実践されることを想定し、時間配当数などは入っていない。学年は便宜的に表中に入れてあるが、あくまでも各ステージの対象学年を表すにとどまる。さらに、図 18 が示すように、内容は「自己」から始まり他とのかかわりの中でテーマの対象範囲をステージごとに広げ、最終的には個としての自分（自己）に戻る成長プロセスをたどることになっている。

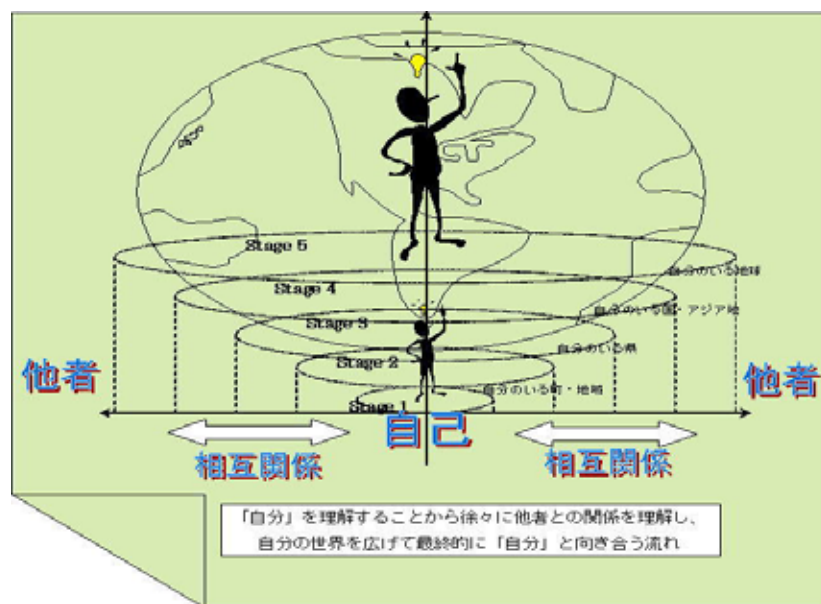


図 18 「連携カリキュラム（試案）」の内容構成の押さえ



表1 小・中・高を見通した「連携カリキュラム(試案)」(「総合的な学習の時間」や教科「外国語(英語)」等を利用して実践可能)

学校		小学校 Elementary School (6 years)					中学校 Junior High School (3 years)			高等学校 Senior High School (3 years)				高校卒業後 大学・一般	
Grade		Grade-1	Grade-2	Grade-3	Grade-4	Grade-5	Grade-6	Grade-7	Grade-8	Grade-9	Grade-10	Grade-10	Grade-11		Grade-12
学年		小学校1年	小学校2年	小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校1年	高校2年	高校3年	高校3年
STAGE LEVEL		STAGE - 1			STAGE - 2		STAGE - 3		STAGE - 4			STAGE - 5			
STAGE GOAL		世界の挨拶や色々な国の子供たちの遊びやゲーム、ダンス等を体験しながら、国際語としての「英語」の音に触れ、指示に従いながらみんなと一緒に歌を歌ったり体を動かしたりして楽しめる。また、英語で簡単な自己紹介(名前、好きな食べ物など)が明るく大きな声で言うことができる。			人によって違いがあることや、また、国によって文化的な違いがあることを知り、それぞれが大切に、多様性のすばらしさを知る。いろいろな活動を通して、だれもが自分と同じ生活をしているのではないことを知り、お話を聞いて考えを膨らませてみる。また、自分の好きな色や味など、英語を使って表現できる。		ものの見方・考え方を広げたり、世の中の不均衡な状況等に目を向けて自ら課題に気づける。また、簡単な表現を用いて、自分の住んでいるところを英語で紹介できる。		国内外の自分たちと同年齢の子供たちの考えを知る機会を設けたり、異文化理解を進めるとともに、世界の中での自分の国についての理解を深め、自らの判断ができる。また、コミュニケーションのために大切に必要なことを整理し、英語を使って自分の考えを表現できる。			世の中を取り巻く相互依存関係に対する視野を更に広げ、「国際人」「地球市民」として、どんなことができるか主体的に自分の考えをまとめ、他者の意見も尊重しながら英語で話し合える。			
テーマ項目(例)		「色々な国の遊び」 「色々な国の歌や音楽」	「色々な国の祭り」 「色々な国や地域の言葉と挨拶」	「私自身1と好きな食べ物」 「色々な乗り物」	「色と虹の世界」 「世界の動物」	「環境(植物)」 「みんな違ってみんないい」 「外国のくらし(特別な水)」	「有名なものは何?自分たちの住むまち」 「いろんな服装」 「世界の学校」	「私自身2」 「みんなでひとつになる方法・スポーツ」 「自分たちの県を紹介(誇れるもの探し)」	「自分たちの国」 「外国から見た日本」 「外国にいる同年齢の子たちと情報交換」	「興味のある国」 「自分の興味のあるものについての日本と他の国との比較」	「アジアの中の日本」	「貿易ゲーム」 「世界の中の日本」	「様々な国際貢献の姿」 「尊敬する人」 「地球未来像」	「私自身3」 「これから何が出来る、これから何がやりたい」	
自己理解 self-understanding		自分たちの国にある遊びや歌と他の国のものとどちらも体験してみ、違いがあることに気づく	自分たちの知っている祭りをさがして(例)こどもの日、ひな祭りなど、外国の人にも紹介できるように折り紙などで作ってみる	自分の名前、住んでいるところ、自分の好きな食べ物を英語でどう表現するかを知りたい	自分の好きな色や動物を英語でどう表現するかを知りたい	人それぞれの顔や形の違いをみんな違ってみんないいと思える(例)自分が確認する(例えば、ジャガイモ等を利用し、じっくり見ると一見同じように見えるものもそれぞれが異なることを実感したりしながら、自己の大切さを考える)	自分たちの住んでいるまちの有名なものは何か、郷土の良さを探して、素直に誇らしさを発見できる	自分たちの県の誇れるものを探し、自分との関係において英語で紹介できる	海外の人に自分たちの国のことを紹介できるように、グループで決めた話題を協力して調べてみる	自分の興味のある国とその理由を平易な英語の表現を用いて書いてまとめたり、短いスピーチとして発表してみる	自分たちのまわりにいる外国人がどういう構成(人数含む)かを身近な外国人について調べてみる	日本の経済がどのように世界と結びついているか調査したり、理解を深めたりする	自分たちが世界でどのような貢献ができるか、自己の興味関心のある分野を中心に調べ、追求してみる	自分を見つめ、これまでこれまでに對して自己の理解を整理する(エッセイライティング等)	
他者理解 understanding others		様々な国に自分たちの知らない遊びや音楽があることを知ったり、そのものを楽しんだりする	国内外を問わず、自分たちの知らない地域の祭りのことに興味をもったり、追体験してみる	友だちの好きな食べ物や自分たちを色々な所へ連れて行ってもらう乗り物に関心をもつ	国によって、例えば、虹の色の数え方が違ったり、動物たちが世界でどういう状況で暮らしているかなど、違いを理解する	植物にはどんなものがあるか英語で表現を知ったり、人と植物との関係を環境等から考えてみる	民族衣装など、衣服を通して、それぞれの地域が大切にしているものを確認してみる	世の中のニュースで気になることに着目し、その背景もあわせて調査して、自分の考えをまとめてみる	海外の同年代の生徒たちなどにアンケート等を依頼し、日本人についてどのような理解が確認できるか確認する	自分の興味のある国のある特定の分野について追求するなど、日本とその国の比較を行い、考えをまとめてみる	国際語「英語」が世界でどのくらい利用されているかデータから読み取るなどして、その有用性を考えたり、認識を広げる	世の中の紛争など問題を取り上げ、その背景なども含めて理解を深める	既に国内外で活躍している国際人のことを調査し、仲間と共に情報や考えを共有する	自己を見つめたように、他者や周囲のものごとのような考えにあるか、インタビュー等を利用し、積極的に知る	
相互関係理解 mutual understanding	(4つの視点をスパイラル状に組み合わせて授業展開することを想定)	自分たちがよく知っている日本の遊びや歌と似ているものが外国にもあることを知る	国際語としての「英語」のアルファベットを音や手話で体験し、世界には違う言語を扱う人がいることを理解する	生活を豊かにしてくれる食べ物や乗り物等と自分たちの関係を考えしてみる	違う文化を持った人たちが世の中にはいることを知り、動物たちは地球上でどういう生活をしているかを知りたい	自分たちと同年齢の子どもたちと自分たちの違いを肌の色や生活環境の違い等を知ることによって理解する	自分たちと同年齢の子供たちがどうい生活をしているか、世界の学校を調べるなどによって理解を深める	世の中の様々な状況に対して冷静に理解する目を養い、みんなが一つになる方法はないか、スポーツ(オリンピック等)や文化交流を端に考えてみる	アンケート結果を基に分析して、何がいえど、個人とグループでまとめる	各自が比較した内容を発表しあい、それぞれの考えを共有する	特にアジアに焦点を当て、日本はどのような関係にあるか調べてみる	世界経済の関係を理解するためのシミュレーション活動として「貿易ゲーム」等を行い、様々な角度から世の中の仕組みを考えてみる	日本人としてどうすべきか、ある命題を立てて、ディベートできるように調査や準備をする	お互いにアドバイスをすることで自己の理解を更に深めたり、考えを広げる	
コミュニケーション Communication		日本語とは違う国際語としての「英語」の音に触れて、真似してみたり、音の違いが感じられる	他人(色々な国の人も)と一緒に歌ったり、踊ったり、楽しく時間を過ごせる	色々な人と交流し、簡単な英語の表現を使って、自分のことを大きな声ではっきりと紹介できる	世界地図などの上で人や動物の分布を認識しながら、環境の違い(気候等も含む)や置かれている状況を想像したり、想定できる	自分たちが成長するには何が必要か「夢の花」を考え、絵等の補助的な表現も利用しながら、他人に発表できる	ポスターやビデオなど視覚に訴える作品などを用いて、自分たちの住んでいるところや自分の学校を英語で簡単に紹介できる	決められたフォーマットの中で準備し、自分の考えを英語でも人前で発表できる	自分たちの認識と海外の生徒たちの日本認識をEメール等を利用して情報交換を深めてみる	他人と理解し合うには何が必要か、コミュニケーションに必要なことを整理し、実践するための方法を英語にしたり、ディスカッションする	自分はこの社会の中で英語とどう向き合っていくか目標を立ててみる	世の中の問題等を認識し、自分たちに何が出来るかディスカッションしたりスピーチしたりできる	実際に英語で調べたことを基にディベートを行い、物事を多角的にとらえる資質を磨く	個として何が出来るか、何を明確に英語でも他人に伝えられる(プレゼンテーション等)	
備考							「静岡県版カリキュラム英語科の「中学卒業時までにつけておきたい力」」		自分なりの意見や考えを持つとする。相手に聞き返したり、簡単に分かりやすく相手に言ってもらうための何らかの行動を自分から起こせる。必要な情報や客観的な自己理解を助けるための情報収集ができる。相手の伝える情報が、大抵どういふ話題、内容が分かる。自分の伝えたい内容を相手に意識して、はっきりと話したり、丁寧に書いたりすることができる。簡単な表現を用いて、相手との情報交換ができる(自分に関係することを中心に、英語を使って会話ができる程度)			*上記「貿易ゲーム」は、紙、ハサミ、鉛筆、定規、コンパス、分度器等を利用して指定された製品を作り、お金を稼ぐゲーム。南北格差や環境問題等、多岐にわたる社会問題を考えたり、世界の社会の仕組みを理解するのに有効。詳しくはインターネット等での情報を参考にされたい。			
「英語が使える日本人」行動計画 <目標>(平成15年3月)							挨拶や対応、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる(平均英検3級程度)			日常的な話題などについて通常のコミュニケーションができる(平均英検準2級~2級程度)				各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定	

小学校学習指導要領 (平成10年12月)	平成15年12月一部改正 「総合的な学習の時間」(国際理解)	(生活科)	(生活科)	「ねらい」:(1)自らの課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する資質や能力を育てること。(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。(3)略「配慮事項」:(3)(5):国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときには、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。																
中学校学習指導要領 (平成10年12月)	英語																		「目標」:外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。 「英語」:(1)英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする (2)英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする (3)英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする (4)英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする	
高等学校学習指導要領(外国語編・英語編) (平成11年12月)	外国語編																		「目標」:外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。	
	オーラルコミュニケーション!																		日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	
	オーラルコミュニケーション!!																		幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	
	英語																		日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	
	英語																		幅広い話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力を更に伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	
	リーディング																			英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	ライティング																			情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	英語編																			「目標」:英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。
	総合英語																			情報や相手の意向などを理解し、情報や考えなどを英語で伝える能力を伸ばすとともに、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
	英語理解																			英語を通して情報や相手の意向などを理解する能力を一層伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
英語表現																			英語で情報や考えなどを伝える能力を一層伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーション能力を図ろうとする態度を育てる。	
異文化理解																			英語を通して、外国の事情や異文化について理解を深めるとともに、異なる文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図るための能力や態度の基礎を養う。	
生活英語																			日常に役立つ英語の基礎的な知識を習得し、それを活用する能力を育てる。	
時事英語																			新聞、放送、情報通信ネットワークなどに用いられる英語を理解するとともに、それを活用する基礎的な能力を養う。	
コンピュータ・LL演習																			コンピュータやLLなどを利用することにより、理解力や表現力を高めながら、英語の総合的な運用能力の向上を図る。	
具体的な言語活動																			「聞くことと言語活動」:(ア)強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴を捉え、正しく聞き取ること。(イ)自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。(ウ)質問や依頼などを聞いて適切に応じること。(エ)話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。「話すことと言語活動」:(ア)強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。(イ)自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。(ウ)聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。(エ)つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長く話をする。 「読むことと言語活動」:(ア)文字や符号を識別し、正しく読むこと。(イ)書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。(ウ)物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること。(エ)伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じること。「書くことと言語活動」:(ア)文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。(イ)聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりすること。(ウ)自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと。(エ)伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと。	
言語の使用場面の例																			a 特有の表現が使われる場面:あいさつ、自己紹介、電話での応答、買い物、道案内、旅行、食事など b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面:家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事など (ア)個人的なコミュニケーションの場面:電話、旅行、買い物、パーティー、家庭、学校、レストラン、病院、インタビュー、手紙、電子メールなど (イ)グループにおけるコミュニケーションの場面:レズテーション、スピーチ、プレゼンテーション、ロールプレイ、ディスカッション、ディベートなど (ウ)多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面:本、新聞、雑誌、広告、ポスター、ラジオ、テレビ、映画、情報通信ネットワークなど (エ)創作的なコミュニケーションの場面:朗読、スキット、劇、校内放送の番組、ビデオ、作文など	
言語の働き																			a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの:意見を言う、説明する、報告する、発表する、描写する など b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの:質問する、依頼する、招待する、申し出る、確認する、約束する、賛成する/反対する、承諾する/断る など c 気持ちを伝えるもの:礼を言う、苦情を言う、ほめる、謝る など (ア)人との関係を円滑にする:呼び掛ける、挨拶する、紹介する、相づちを打つ、等 (イ)気持ちを伝える:感謝する、歓迎する、祝う、ほめる、満足する、喜ぶ、驚く、同情する、苦情を言う、非難する、謝る、後悔する、落胆する、嘆く、怒る、など (ウ)情報を伝える:説明する、報告する、描写する、理由を述べる、など (エ)考えや意図を伝える:申し出る、約束する、主張する、賛成する、反対する、説得する、承諾する、拒否する、推論する、仮定する、結論付ける、など (オ)相手の行動を促す:質問する、依頼する、招待する、誘う、許可する、助言する、示唆する、命令する、禁止する、など	



## 4 実践事例報告

### (1) **協力実践事例** - 小学校段階（掛川市立和田岡小学校）

#### ア 学習集団

本校は掛川市の北西部に位置し、全校 209 人（H16 は 9 クラス、H17 は 8 クラス）である。平成 16 年度から 2 年間にわたり、すべての学級で 1 年目は年間 7 回、2 年目は 6 回の英語活動を行い、調査した。事例紹介する本学級は第 5 学年 35 人で、平成 16 年度の英語活動で初めて「英語」に触れた子供が 3 分の 2 を占める。英語塾に通っている者は約 4 分の 1 いるが、いずれも日本人による指導であり、ネイティブ・スピーカーの英語に接するのは全員が初めてという状況にあった。2 年連続して同じ ALT が担当したため、子供たちはより親しみを持って授業に臨むことができた。

#### イ 実践状況

テーマ：「**Transportation（乗り物や交通）**」（45 分授業）

視 点：（コミュニケーション）（相互関係理解 <他者理解>）（自己理解）

【授業概要】平成 17 年度(2005 年) 6 月実施（HRT と ALT での TT 指導、当該年度第 3 回目授業）

（導入）最初に「乗り物や交通」に関する英語表現を学習した。日常生活で耳にする言葉が比較的多いため、「car」「truck」「bus」などの単語はすぐに発音できるようになったが、耳慣れない単語や「t」の音など聞き取りにくくて発音しにくい音を含む単語は友達に聞いたり、HRT に確かめたりしながら活動を進めていた。「乗り物の言い方がよく分かって嬉しかったです。」「『新幹線』(bullet train) はちょっと難しかったけど、いっぱい乗り物を覚えて楽しかったです。」という感想が示すとおり、子供たちは難しさを感じながらも、新しい言葉を知ることに関心を持っている。

（展開 1）導入で示された「ターゲット・ボキャブラリー」が盛り込まれた「『あるバナナの旅』のお話」(“Travels of a Banana” Story) の読み聞かせを行った。授業では、学習内容や ALT の指示を HRT が適宜子供たちの理解に合わせて支援するのだが、本時の読み聞かせは ALT による英語のみで行った。物語には、「ターゲット・ボキャブラリー」のうち、「bike」「foot」「truck」「ship」「car」の 5 語が登場する。それらを聞き取り、出てくる順に並び替える活動では長文であることと日本語での意味の説明がないこととで、5 語の順番を正確に聞き取った子供は 1 人であった。その後、HRT が「ターゲット・ボキャブラリー」を確認しながら、物語の内容を日本語で伝えた。

（展開 2）後半は、ゲーム「バナナ競争」(Banana Race) (図 20) を行った。4 ~

5 人 1 チームとなり、2 枚の新聞紙の上に全員が乗って、右に紹介する「会話表現」を使って進んでいく。最初に答えたチームが、次

会話表現 ALT : **How will you get there?**

交通手段が描かれたフラッシュカードを提示

Ss : (絵を見て答える) **By** (car, truck, bike, foot, plane, bus, train, bullet train, ship, space ship) .

の新聞紙に乗り移ることができ、これを繰り返して早くゴールに達したチームが勝者となる。新聞紙は「乗り物」で、破ることは「乗り物を壊すこと」、はみ出るとは「乗り物から落ちること」であり、スタートからやり直す。子供たちは、解答権を得るために口々に単語を言った。普段は恥ずかしがってあまり声を出さない女子も、この時ばかりは単語を連呼するほど活発に活動した。発音しにくかったり覚えにくかったり



する単語を ALT が意図的に提示することにより、子供たちは次第に発音できるようになっていった。

(まとめ)『あるバナナの旅』のお話を踏まえ、バナナを始め多くの食べ物が世界からやってきていること、自分たちの生活は日本単独で成立しているのではないことなどを HRT から伝えた。本時を、「英語」ではなく「国際理解」として位置付けたいという願いがあったからだが、子供の「バナナのお話はすごいなと思いました。フィリピンからいろんな乗り物を使ってやっと日本に来たからです。食べ物は日本で作られたものだけではなくて外国から来たりしているから、大切に食べたいなと思いました。」という感想からも教師の意図は十分伝わったと思われる。



図 20 (展開 2)「バナナ競争」

## ウ まとめと考察 (授業者)

授業を通して子供たちの思いがけない姿に常に出会えた喜びをまず述べたい。普段はとてもおとなしい子供が全体の前に出て “thumbs up” つきで発表したこと、友達とのかかわりに消極的な子供が、「私はいっぱいみんなと答えました。それで(ゲームに)勝ったので嬉しかったです。」とコメントするほどグループ活動にのめり込んだことなどである。いつもとは少し違う自分を子供たち自身が自覚し、肯定的に受け止めていることが嬉しい。そして何より授業を通して、「文化としての英語」「世界の中の日本」「足下から始める国際理解」に子供の意識が向きつつあることに大きな価値を感じる。前述のとおり、本時のまとめを HRT がすることによって活動を適切に価値付けできた。平成 17 年度、他テーマの実践時には次のようなまとめも行った。

### 第 2 回目 “Weather and Special Water” (天気と特別な水)

乾いた大地が広がるシエラレオネの写真を見せ、世界にはこういう国もあること、水(雨)はとても大切なものであることを話した。

**子供の感想**: 雨が降ると遊べなくてつまらないと思っていたけど、世界には困っている子もいるから、自分ばかりいいのではなくてそういうことも考えないといけないと思いました。

### 第 4 回目 “My School” (ぼく・私の学校)

ALT が紹介した世界の学校の写真に加え、ユニセフ発行のポスター「私も学校に行きたい」を見せ、世界には学校に行きたくても行けない子供がまだまだいるということをお話した。

**子供の感想**: 教室もない、机も椅子もない所で暮らしている人もたくさんいるんだと思いました。そんな生活はいやです。だから、物を大切にしようと思いました。

### 第 5 回目 “Clothing” (衣服)

パリのサロンを実際に着て見せ、その国の衣服と文化とのつながりについて紹介した。

**子供の感想**: その国によってみんな持っている服があるのかっこいいなと思いました。

授業者個人として、英語活動とは英語という文化を丸ごととらえるものとする。単なる言語でなく、それが持つ体温や匂い、味わい全てを受け止めたいし、子供たちにもそうであってほしい。本学級をはじめ 1・3 年では、ALT と HRT による TT で授業を展開(2・4・6 年は授業比較の目的もあって ALT、JTE、HRT で実施)したことは、HRT の伝えたい思いをより明確に伝えられるという意味において意義深いものであった。言語としての英語より文化としての英語、人とのかかわりの中で育まれた空気をまず感じる事が、英語そのものへの興味関心をさらに喚起するのだろうと思われる。

(2) **協力実践事例** - 中学校段階（掛川市立桜が丘中学校）

**ア 学習集団**

本校は、掛川市の北西部に位置し、全校生徒約 450 人という規模である。国際理解に関しては、専門委員会の中に国際理解委員会があり、いろいろな国について調べ、それを掲示物にして掲示したり、全校集会で全校生徒の前で発表したりしている。しかし、普段の英語の授業の中では ALT 以外に外国の生徒の考えや思いに触れる機会がなかなかないので、生徒にとって有益な実践は何であるのかを探った。今回事例紹介する授業に参加した生徒は、3 年生 1 集団（男子 17 人・女子 19 人）である。

**イ 実践状況**

**テーマ** 自分の興味のある国とその理由を英語で書き発表しよう。（2 時間配当）

**視点**：（他者理解）（自己理解）（相互関係理解・コミュニケーション）

**【授業概要】**（平成17年度(2005年)6月実施、JTEとALTでのTT指導）

（第 1 時）食べ物がおいしそうなお国、景色が美しそうなお国、スポーツが強そうなお国などの簡単なアンケートを事前に行い、その結果発表をクラス全体で最初に共有してから、自分にとって興味のある国を一つ選び、理由も含めて英語で書く活動を行った。生徒たちは全体でのアンケート結果に大変興味を示し、その後のスピーチ原稿準備活動へと円滑に移行した。次時に小グループ及びクラス全体に向けてスピーチ発表することを予告し、家庭学習も有効に使うことで授業を進めることとした。



図 21 （第 2 時）  
興味のある国スピーチ

（第 2 時）スピーチでは、その内容に合った具体物（雑誌やインターネットから用意した写真や絵など）を見せながら英語で話すようにした。また、原稿を見ないで暗記して言えるように練習した上で、スピーチ(図21)に入った。同時に、発表時に他者の発表の論点をメモに取っていく活動と組み合わせ、聞く活動も大切にした。

**テーマ** 外国の同年代の生徒の生活や考え方を知ろう。（5 時間配当）

**視点**：（自己理解）（他者理解）（相互関係理解）（コミュニケーション）

**【授業概要】**（平成17年度(2005年)10月実施、JTEソロとJTEとALTでのTTでの指導）

時間	学習活動計画
第 1 時	カナダの生徒に質問する英文を書こう。
第 2 時	カナダの生徒がどんな答えを書いてくるか推測し、それを英語で書こう。
第 3 時	カナダからの生徒の質問に答えよう。 ・カナダの生徒が作った質問の英文を読んで、理解する。 ・質問されたことに対して、英語で書いて答える。
第 4 時 (TT)	カナダ人生徒役と日本人生徒役に分かれて、お互いの生活について質問し合い、わかったことを他の人に英語で紹介しよう。
第 5 時 (TT)	カナダの生徒の日常生活などを日本と比較して気付いたことやカナダの生徒の質問に対する答えを英語で表現し、ビデオレターにして送ろう。 ・気付いたことや質問の答えを英語で書き、それを暗記して言えるようにする。 ・覚えた英語を表情豊かに表現し、ビデオに撮って、カナダに送る。 ・ビデオ内で表現しきれない部分は情報提供としてポスターに書いて伝える。

(第1時)「カナダの学校は何時に始まるか。」「朝食は何を食べているか。」「どんな音楽を聴いているか。」「日本について知っていることは何か。」などの質問を作った。

(第2時)自分たちが考えた質問に対して、カナダの生徒たちがどんな答えを書いてくるか推測して、その答えを英語で書いてみた。

(第3時)カナダの生徒から日本の生徒に質問の英文が来たので、その質問の英文を読んで、英語で答えていくという内容の授業を行った。

(第4時)第2時で予想した答えと実際にカナダの生徒が答えている内容を比較しながら、クイズ形式にして答えを確認した。その後、お互いの生活や考えについて英語を通して理解するという



図22 (第4時)  
カナダ人生徒の意見確認

目的で、クラスの生徒をカナダ人生徒役と日本人生徒役に分け、お互いの生活などについて質問したり、わかったことを他のグループの生徒に英語で伝えたりするという活動(図22)を行った。

(第5時)メンバー紹介、カナダの生徒の生活や考えについての感想、カナダからの質問への回答、誤解されていた日本についての説明、その他メッセージ等、グループ内で役割分担し、暗記して言えるようになるまで練習した。最後にそれをビデオで撮影して、ビデオレターとしてカナダに送った。ビデオ撮影後や順番待ちの間は同時に情報ポスター作り(書く活動)にも取り組んだ。

## ウ まとめと考察(授業者)

今回の一連の授業実践を振り返ると、どの活動においても生徒が大変意欲的に取り組んでいる姿が見られた。実践状況 では、国アンケートに答える段階から、まだ行ったことのない国に思いをよせ、自分なりのイメージで生き生きとアンケートに答えていた。自分が興味のある国とその理由を英語で書く場面やそれを暗記してスピーチする場面では、大変積極的な活動が確認され、特にスピーチは、具体物を用いながらどの生徒も自分の思いを聞き手に伝わるように話すことができたことが印象深い。また、実践状況 では、カナダの生徒に質問したいことを辞書を使って調べたり、友達やALTに積極的に聞いたりした。また、難しい単語や知らない単語が含まれているカナダの生徒が答えている英文を読んで、一生懸命理解しようとしている姿が観察された。第4時の会話の場面では、カナダ人生徒役になりきって生き生きとコミュニケーション活動に取り組み、暗記練習の段階では、自分たちの英語がビデオを通して伝わるか心配している生徒もいたが、第5時の最後のビデオレター収録では、カナダの生徒に自分たちのメッセージを伝えようと表情豊かにカメラの方をしっかりと向いて話すことができた。(図23)



図23 (第5時)  
ビデオに向かって発表

生徒の書いた感想を読むと、「少し大変だったけど、楽しく英語に取り組むことができた」、「またこのような授業をやりたい」、「今まで学習してきたことを実際に使うことができ嬉しかった」などの感想が多く見られる。実際にカナダの生徒と英文のやりとりをする中で英語を使っているという実感を味わえたり、現地の同年代の生徒の今の生活や考えに触れることができたりしたことが、生徒の意欲を高めるのに有効であった。また、非英語圏を対象に同様の活動ができるのではないかと思われた。

### (3) 協力実践事例 - 高等学校段階（静岡県立掛川東高等学校）

#### ア 学習集団

本校は掛川市にある創立 90 年、全校生徒数 885 人の県立高校である。今回紹介する授業に参加した生徒は、1 年生の特別進学クラス習熟度別（2 クラス 3 集団編成）上位者集団 26 人（男子 6 人・女子 20 人）で、1 年時に「英語Ⅰ」（3 単位）と「OCⅠ」（2 単位）を履修している。生徒個々の英語への関心は高く、研究実践は「英語Ⅰ」の中で実施した。

#### イ 実践状況

テーマ 「アジアの中の日本」（3 回完結：50 分授業 3 時間配当）

目的(ア)代表的なアジア諸国に関する自分の知識理解を確認する（自己理解）

(イ)アジア人へのイメージや認識を他者と共有し、理解を広げる（他者理解）

(ウ)自分たちの周囲の身近な国際化を認識し、考えを深める（相互関係理解）

(エ)生徒個々に「英語」とのかかわりについて考えさせる（コミュニケーション）

【授業概要】（平成 17 年度（2005 年）11 月実施、JTE と ALT での TT 指導）

##### 第 1 回「アジアって何？」（自己理解）

(活動 1) 「What is Asia? アジアって何？ どれだけアジアの国を知っているか」  
5 分間でできるだけ多くのアジアの国の名前を英語で書き出してみる。

(活動 2) 「アジアの国の情報集め」

「リードアンドラン」の形式でアジア諸国についてのワークシートを完成させる。

生徒を 4～5 人の 6 グループに分け、アジア諸国に関する背景知識を広げるための活動 1、日本と密接な関係にあるアジアの代表的な 5 か国 (China, India, Thailand, Korea, Philippines) の基本的な情報を英語で入手する活動 2 を行った。活動 1 では、各グループで平均 20 か国ほどが挙がり、活動 2 では、それぞれの国の平均余命、日本在住のその国の人の数、その国で暮らす邦人の数、その国の有名なものを知った。その結果、生徒の視点を身近なわりに関心の薄いアジア諸国へ向けることができ、英語のネイティブ・スピーカーとすべて英語で会話しながら学習を進める状況においても、生徒たち自身が自然と楽しむ雰囲気ができあがった。

##### 第 2 回 「アジア人ってどんな人？」（他者理解）

(活動 3) 「国籍プロフィール」

生徒の持つ日本人・韓国人・中国人の人格、服装、体型等のイメージをまとめる。

(活動 4) 「国籍クイズ」(図 24)

活動 3 を受け、10 人の写真を見て上記 3 カ国のどの国の人かを推測する。

前回と同じグループで活動した。まず、活動 3 で国籍によるイメージをまとめ、活動 4 でそのイメージがどこまで通用するのかを確認した。活動 3 では予想通り、生徒の持つ様々な固定観念が浮かびあがった。しかし、続く活動 4 で平均して 10 問中 3 問程度しか国籍を当てることができず、固定観念と実際とのギャップを知ることができた。この固定観念の打破は国際理解における他者理解、相互関係理解の重要な入り口になると確信した。



図 24 (活動 4) 「国籍クイズ」



### 第3回「(自分も含め)アジアの若者の考えは？」

(相互関係理解・コミュニケーション)

(活動5)「スピーチ内容と絵の順番あわせ」(図25)

中国・日本(静岡)の両国で生活経験を持つ中国人中学生の話をもとに8枚の絵にして、その英文スピーチ原稿を速読しながら内容に合わせて絵を並べる。



図25(活動5) 同年代の考え

(活動6)「インド人の生徒のスピーチ」(図26)

日本で生活したインド人高校生の日本語での「私の見た日本」に関するスピーチ(DVD)を見る。



図26(活動6) 私の見た日本

(活動7)「バリバリ数字推測ゲーム」

自分たちの周りの国際化についてクイズ形式で実際の数字を知る。

今回もグループで活動し、活動5は、日本で幼少期を過ごした中国人少女の実体験を引用して、国籍や言語、人種などについて再度考える機会とした。

活動6では、日本人以上に日本人らしく「茶道」について日本語で語るインド人少年の話聞き、身近な国際化や言語の持つ力を実感した。活動7では総括として、静岡県の外国籍人口や世界の英語使用人口などについて数字を通して確認する活動を行い、「身近な国際化」を数値でも確認した。このような学習から生徒は国と国の垣根は予想以上に低いことに気づき、日本人と他のアジアの人々との多くの共通点も発見できた。このような一連の授業の最後に、何のために英語を学習し、それをどのように生かしていくのかという問題を生徒に投げかけ授業をまとめた。

#### ウ まとめと考察 (授業者)

生徒の授業アンケートから(抜粋)

(ア)アジアと日本、アジア人を考えるという内容について

- ・自分のアジア人の印象と授業はずいぶん違っていた。思い込んでいたことが多かった。
- ・アジア人同士、お互いの文化などを尊重したいと思った。
- ・中国や韓国の人に対して親近感が生まれた。
- ・古くからの日本の良い文化を次世代に伝えていかなければならないと感じた。
- ・世界の共通語として「英語」を学ぶことが重要だと感じた。

(イ)「ためになった」と思う活動

1位:(活動6) 2位:(活動4) 3位:(活動5) 4位:(活動2)

(ウ)今後「英語」を通して学習してみたい内容は

- ・日本について英語で学習したい。
- ・外国の文化、歴史、国による英語の違いについて。
- ・童話、外国小説。
- ・会話表現。

生徒たちは身近なアジアの学習を通して、アジアに対する「自己」の理解から「他者」及び「相互関係」への理解や認識を深め、個人差はあるものの、一様に固定観念からの脱却ができた。この学習集団に今回の内容に触れさせたのは初めてだが、アンケートにも表れているように「英語とどのように向き合っていくか」という意識付けの「種」を蒔くこともでき、今後につながることを期待したい。さらに、ALTと共に英語だけで行う授業に生徒が大変意義を感じ、積極的に楽しんで取り組める内容のため、日常的な取組としても積極的に活用していきたい。

#### (4) 実践協力 ALT のまとめと考察 (授業者)

小中高にわたり研究協力員と実践する中で感じたことは、カリキュラム全体構想の中で根底に据えられている「国際理解教育」のテーマは、一見実践するにはかなり難しいものに見えるが、一度授業レベルや個々の活動レベルに下ろしてみると、それらを授業の準備段階における指針として使った場合の利点は明白であるということだった。

例えば、小学校で「学校」に関する語いを扱った場合、もともと別段取り立てた内容になりにくいレッスンであっても、他国の子供たちの状況と比較しながら紹介されることによって、普段何気なく使っていた学校の施設設備や教具などに対して、自然と自分たちの豊かさ感謝する機会とすることもできた。中学校では、内気な生徒たちが地球の裏側にいる生徒と連絡を取ろうとするために英語を使ったときの興奮はあふれんばかりであったし、高等学校では、外国人の国籍当てに際して身体の様々な特徴を言い表す英語表現を覚える以上に、自発的に学ぶ姿や活発な活動状況が確認された。

指針として「連携カリキュラム(試案)」を使うことによって、どんな言葉を教えるかを定めることから一旦離れ、まず何のために教えるかという授業計画に焦点を与えることになった。これは、指導者が何より言葉を授業の中に取り込む際の創造的な方法を考えることにつながり、児童生徒たちにとっては、国際理解のテーマ性があることで学ぶ言葉の知識を適切に状況に合わせて応用させることにもつながった。統合した一貫性のあるカリキュラムを学んでいくことは、小学校段階からの円滑な能力伸長を保障するために大切な一歩一歩と考える。協力実践事例で紹介されたレッスン等は、指導者にとって自身の指導をより豊かなものとするための出発点として利用されることを望む。

#### (5) 授業実践の全体像と児童生徒の反応や実態

##### ア 授業実践の全体像

研究協力員や ALT 等と 2 年にわたり年 2 回程度、期間を設定して定期的実践授業を展開した。その結果、「連携カリキュラム(試案)」(表 1)の活動例として示した内容は、「総合的な学習の時間」や一般的な「英語」の授業内で各校種に取り込んでてもすぐに実践できることが確認された。

表 2 レッスンユニット一覧(実践済み内容)

STAGE 1	STAGE 2	STAGE 3	STAGE 4	STAGE 5
<b>Lesson 1</b> Hello from the World (World Greetings)	<b>Lesson 6</b> Animals	<b>Lesson 11</b> World Costumes (Clothing)	<b>Lesson 16-</b> (1)(2)(3) Self-Introduction E-mail (E-mail & Exchange Party)	<b>Lesson 20-</b> (1)(2)(3) The World and Economy (World Trade Game)
<b>Lesson 2</b> World Songs and Games (Same or Different)	<b>Lesson 7-</b> (1)(2)(3)(4) Rainbow (Colors)	<b>Lesson 12</b> Schools around the World (School Supplies)	<b>Lesson 17-</b> (1)(2) My Favorite Country (Speech)	<b>Lesson 21-</b> (1)(2)(3) Fair or Unfair? (Opinions, Mini-Debate)
<b>Lesson 3</b> World Festivals (Maze and Dance)	<b>Lesson 8</b> Travel (Transportation)	<b>Lesson 13</b> Famous Foods in Here (Food- Local products)	<b>Lesson 18-</b> (1)(2)(3) Questionnaire on Japan and Japanese People (Video Letter + Poster)	<b>Lesson 22-</b> (1)(2)(3) Environment, What Can We Do? (Research Project & Role Play)
<b>Lesson 4</b> Christmas (Holiday Celebrations)	<b>Lesson 9-</b> (1)(2)(3) Potatoes in the Box (Shapes, Individuality)	<b>Lesson 14</b> Dream Flower (Occupation)	<b>Lesson 19-</b> (1)(2)(3) Japan and Asia (Internationalization)	
<b>Lesson 5</b> Happy New Year (Japanese Traditional Kids' Play and Games)	<b>Lesson 10</b> Special Water (Weather)	<b>Lesson 15</b> Smile, Love and Friends (Communication)		

(注) なお、表中 は小学校、 は中学校、 は高等学校での「協力実践例」で言及されているものを示す。



表2は、授業実践内容をレッスンユニットとして「連携カリキュラム(試案)」のステージ対応型でまとめたものである。これらの授業実践について、小学校では授業実践観察だけでなく毎回授業後に感想を書いてもらうことで、子供たちの個々の理解や成長の度合いを確認した。中高に関しては、授業実践観察と生徒による授業評価を行い、本人たちの関心・意欲及びそれぞれの言語活動や授業の受け止め方を調査した。

#### イ 授業実践で観察された児童生徒の反応の違いや変化

小学校では、低学年でも高学年でも子供たちが学校で初めて英語に触れる状況にあったため、同じテーマでも発達段階によって活動にどのくらい幅を持たせられるか、併せて検証を行った。右のコメントからは、低学年では指導者への思いや英語を学ぶことに対する意欲を確認でき、音声中心で進められる授業で英語をどう聞き取ったりできるか等も把握できた。授業者からの報告でも言及されたが、文化的な背景や世界の現実を身近な形で紹介したりすることによって、単なる言葉に慣れ親しむことにとどまることなく、それぞれの学びや気付きにつながった。さらに学年が上がれば、次第に情報の受け入れ方や意見の持ち方に違いが見られ、相手に伝えたい思いやコミュニケーションを取りたい気持ちが一段と高まり、何らかの行動に自然と移せることも確認できた。

中学校段階は、協力実践事例で紹介した中学3年生たちを振り返ってみると、6月と10月に通常の授業とは異なる内容という位置付けで2つのテーマで授業を実施したが、学習活動の受け止め方はコメントのように好意的な変化がうかがえ、興味・関心も高い。その中で10月の活動で「大変よい」と答えた生徒の中には「(海外の人に)

コメント (小学生) (表2「Lesson 10」関連)  
 「“Weather and Special Water”(天気と特別な水)」

2年生

- ジョアナ先生は、にほん語をおぼえようとしていてジョアナ先生は二つもえいごで日本語をおぼえてすごくえいごも日本語をできてうらやましいよ。(男子)
- ピンゴがおもしろかったよ。またやってみよう。そのつぎにスペシャルウォーターをつくたのはあめがふらないくにはこのみずをのむから。(男子)

4年生

- 外国の人々が困ると聞いた時「そうなんだ」と思い、「日本が晴ればいい」と思っていたけどほかの外国の事も考えなきゃなと思いました。楽しくおもしろい一時間でした。(男子)
- 先生がつくってくれたすぺしゃるジュースはとてもおいしかったです。ほんとうに人のいのちがたすかるのかなと思います。英語のべんきょうはとてもたのしいからはやくやりたい。(女子)

6年生

- 弟たちは、みんなあのスペシャルウォーターがまずいといっていたけれど、ぼくは、飲んでみたらポカリスエットみたいなあじがおいしいと思いました。くもりとかむしあついかはじめてだったのでもっと英語が勉強したくなつたし、すごくおぼえたのでよかったなと思いました。(男子)
- ジョアナ先生、先生はどんな天気が好きですか？きのうくれた水、先生は好きなのですか？私 はあまり好きではないよ。あつ日は風がふくといいね。このことをえい語で何っていうのですか？日本のマップの天気を聞くのはえい語でたい変だったけど、おもしろかったよ。ありがとう。(女子) <原文そのまま>

コメント (中学生) (表2「Lesson 17・18」関連)

(6月) 自分の興味ある国を調べて、具体物を使って英語でスピーチをしたり、他人の英語のスピーチを聞いたりした活動。

大変よい	よい	普通	あまりよくない	悪い
13	12	7	1	0

(10月) カナダの生徒に日本や日本人についての意識調査を行い、それに対する意見交流の活動をした後、ビデオレターで日本紹介を行ったり、情報を伝えるための書く活動を行ったりした活動。

大変よい	よい	普通	あまりよくない	悪い
21	9	3	0	0

通常の授業と異なって実施された6月や10月のような「自分と外国、あるいは自分たちと外国の人たち」とを身近な部分から考え、新たな発見をし、自分の考えを広げていく内容はどうか。あなたの関心・意欲は？

大変興味をもてた	興味をもてた	興味があまりもてなかった	全然興味もてなかった
13	20	0	0

日本を好きになってほしかったから」とその理由をあげたものもいた。

高等学校では、高2から高3にかけて3期にわたり実践したクラスの場合、テーマは「世界経済のしくみと現状理解・認識(貿易ゲームを中心に)」、「メディアリテラシーと物事のとらえ方・考え方(ミニ・ディベート)」、「環境問題(調査プロジェクトとロールプレイ、何が自分たちにできるか)」だった。JTEとALTとの英語のみによる指導形態で、その授業展開の中心は生徒たちが自主的に取り組むように計画され準備された多様なグループ活動だった。生徒の授業評価の最終自由

コメント (高校生)

(表2「Lesson 21・22・23」関連)

高2(11月)

- 英語を持つと勉強して、英語で会話ができるようになりたいという意欲がとても高まりました。
- いざ英語で自分の意見を言うとなるとなんといいのかわからず苦労した。
- この3日間、学校へ行くのがとても楽しみでした。 - 年に何回かこのような授業を取り入れれば、英語が苦手な人も楽しんで授業ができると思う。

高2(1月)

- 今度(指導してくれたALTに)会うまでもっと自分の英語力をつけてペラペラに話せるようにしたい。
- こういう授業は自分の英語力を高めるのに必要だし、ALT(ネイティブ・スピーカー)とより深くコミュニケーションが取れて楽しい。

高3(6月)

- はじめは、自分の考えを英語で発表することに抵抗があったが、抵抗がなくなっていった。
- 今後このような授業をもっと取り入れれば、皆の英語への興味・関心が高まるのではないか。
- これから受験勉強を本格的にやらねばならないから、こういった授業は新鮮でためになった。

記述欄のコメントを追ってみると、コメントのように、授業そのものの内容以外についても生徒たちの思いの一端を推し量ることができ、自己の新たな目標及び取組への意義や価値を見出していることが伝わってくる。

ただし、中高での取組に関しては実践内容が生徒本人たちにとってはあまり経験がない上、発展的な内容に相当するため、普段の授業での基礎・基本の積み上げがあったからこそ、より活発な姿が確認できたことも忘れてはならない。

ウ 協力実践校における中高生の実態(平成17年6月実施、一部紹介)

研究協力員の所属校の協力を得て、中学1年(全4クラス)と高校1年(学年抽出4クラス)に、「英語学習に関するアンケート」も実施した。研究協力員との授業実践では限られた生徒への調査となるため、もう少し範囲を広げて中高生が現在、英語学習に関してどのような意識を持っているかを把握し、併せて、特定の近隣地域に限ってではあるが、小学校英語がどのような広がりを見せているか実態をつかむために実施した。質問事項と回答者数は次のとおりである。

図27は、質問「あなたが英語を勉強する理由や目的は何か(複数回答可)」

(回答: 中学 n=140 高校 n=153)

図28は、質問「あなたが英語を始めたのはいつ頃か」

(回答: 中学 n=139 高校 n=154)

図29は、質問「英語の学習について、重要だと思われるものを順にした場合、1番目と2番目に重要なものの記号はそれぞれ何か」(回答: 中学1番目 n=139 中学2番目 n=138 高校1番目 n=154 高校2番目 n=152)

図27 英語を勉強する理由や目的 (複数回答)

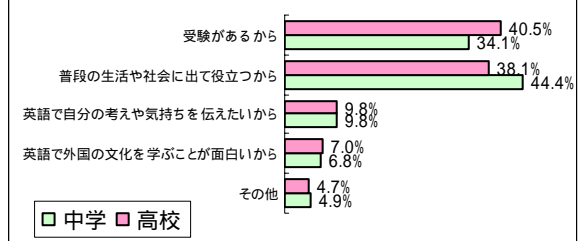


図28 英語を始めた時期

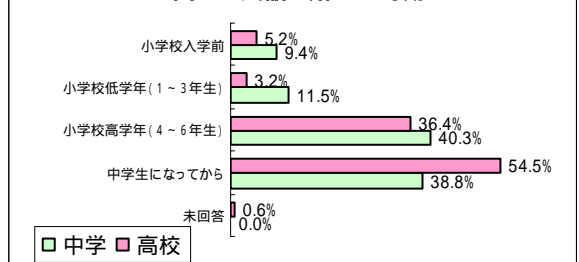
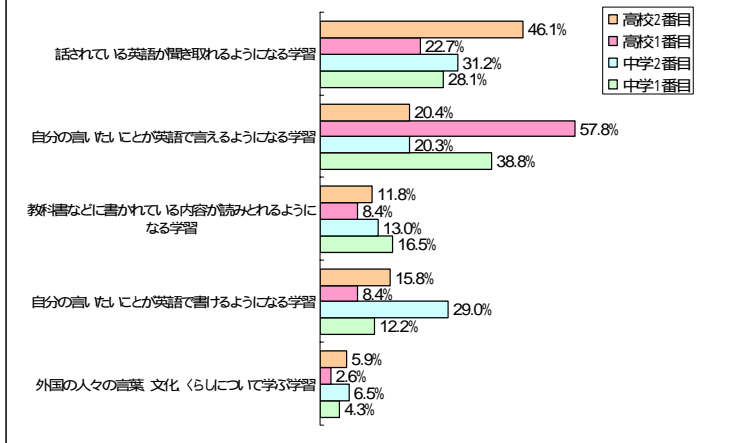


図29 英語学習で重要だと思われるもの(1番目、2番目)



スの4割以下(38.8%)になっており、今後、益々この傾向は加速すると推測される。図29からは、中1生が英語の勉強で第1に重要と考えているのは「自分の言いたいことが英語で言えるようになる学習」で、次に「話されている英語が聞き取れるようになる学習」となっており、その差は10ポイント以上である。一方、高1生は同様の傾向を見せつつも、57.8%が言えるようになりたい、22.7%が聞き取れるようになりたいとその差が35ポイント以上にもなっている。また、第2に重要と考えているもののうち、特に中1生では「自分の言いたいことが英語で書けるようになる学習」の項目が、「話されている英語を聞き取れるようになる学習」と同様に高くなっている。

研究協力員の所属校は英語圏以外の外国人労働者や外国人児童生徒の多くいる地域で、これまで公立小学校での英語があまり扱われていなかった地域にある中学・高校と言えるが、このような調査からも中学校以前における英語教育が加速的に始まっていることがうかがえ、その対応への状況は刻々と変化すると予測される。加えて、生徒たちの学習内容へのニーズも、割合としての変化が出てくるものと思われる。

## 研究のまとめ

本来、学習者は自分の学びに責任を持ち、どう自分を高めるべきか、また、何が不足し何が長けているかを自己分析・自己確認し、次への行動へと移していくことが大切である。そのように自発的に目標設定し、さらなる目標に向かって自らを高めて成長していくことが、主体的に学ぶ学習者の姿であり、これこそ国際社会に主体的に生きる日本人としても必要になってくる要素の一つであると思われる。しかし、これまで学校英語教育の指導において不足してきた視点は、「学習者主体」の学びはいかにあるべきかということではなかろうか。指導する教員側は指導体系が見えていても、何より学ぶ側の学習者が自分の学びを体系的かつ具体的にイメージすることが難しく、受け身的にならざるを得ない。そのため、「何のために勉強するのか」という学習者の動機付けにも影響する。最近ではシラバス等が整備されてきているが、期間的にも短期のものが多く、まだその発展途上のものが少なくない。それらのシラバスを利用しても、学びの全体構造や学習過程が見えにくい上、英語教員の指導内容に関するアンケート調査結果からも大勢を推察できると思われるが、教科書の流れ、教員個人やある学年集団で決定されたもの等の影響を受けたものと様々であり、やはり学習者側に立って考えたものでないことの方が多いたことが指摘できる。

また、「学び」の継続性の観点から考えた場合、ある学年やある校種を修了して次に進めばまったく違うプログラムの中へと学習者たち(児童生徒)は受動的に取り込まれ、新たな出会

いや新たな局面での効果は期待できるが、学習者本人にとってみれば意識するしないにかかわらずその状況に合わせて対応し、能力伸長を図っていく構図となる。特に語学教育に関しては「英語が使える」というレベルまで外国語としての英語の運用能力を高めるには、継続した学習体系及び指導体制のなかでの「一貫性」が鍵になる。だからこそ、校種を越え、連携して利用していくことを想定した「連携カリキュラム(試案)」を模索し、学ぶ中身の一貫性を焦点にその具体化を試みた。学習者も指導者も共通の情報を持ち、それぞれの段階におけるゴールを協力して目指すことによって、発達段階に合わせた学びと指導を無駄なく確実なものとしながらその学びと指導そのものを豊かなものにできると考えるからである。

さらに、学びと指導の全体構造を明らかにするためには、基本理念が重要である。やはり、教育活動の根幹には、「何のために学ぶのか」や「何のためにやっているのか」が見えなければ方向性がぶれ、さらに最終的な到達の姿が見えなければ、それぞれの段階における適切な到達目標も見えない。そういった意味でも、共生が求められる現代グローバル化社会において「21世紀に生きる日本人にとって大切なものは何か」についての理解を深め、ビジョンを持って進んでいくことが求められるため、本研究で作成した「連携カリキュラム(試案)」は、国際理解教育の視点をその基盤とした。具体的には、学習活動はできるだけ「個」から「集団」、「集団」から「個」へと自他の交わりの中で自己を磨き、最終的に「個」である自分に戻る設定とした。また、取り扱う内容は自分(「自己」)から「身の回り、自分の住む市や町、県、日本、アジア、地球」へとその範囲を「他者」との関係において広げていくこととし、態度や資質の育成と語学面の学習との融合を図った。

「連携」は、1人でできるものではない。教員それぞれが点として存在しつつも「共通の目標」に向けて全体で確実な線や面の役割を果たすことが求められる。静岡県では「英語教員の資質向上のための研修」内容に、参加者同士、中学と高校の教員が自分の授業をお互いに参観し合い、年間を通じてグループで話し合う機会を設けている。また、本研究で調査した研修参加者のアンケート結果から、校種を越えてお互いが連携し合うためのカリキュラム構築の重要性を認める声が強いことも伝わってきた。そのため、今回作成した「連携カリキュラム(試案)」が、お互いに教員が効果的に連携していくための具体的なイメージ共有のためのたたき台となることを期待したい。一方、学習者は指導者が途中で代わりとうも、現在学んでいる内容やその後につながる学びを、例えば、常にインターネット・ウェブ上で確認できたりすることで、目標と照らし合わせながら主体的に自らの力の過不足を認識して、自分の学びを確実なものとしていくことも可能ではなかろうか。勿論、これは学習者本人の努力が必要であるし、特に中高生に期待したい姿といえるが、着実に学んでいけば学んでいった先にある具体的な自分の姿が紹介されているため、指導者同士の連携のみならず、学習者も取り込んだ形でのきめ細かな指導と学びの一貫性を実現することにつながるのではないかと更なる期待も高まる。

今回の研究では「資料編」を作り、インターネット・ウェブ上で実際の授業で使える具体的な授業案及び活動案レベルまでおろした内容も紹介する予定でいる。小学校段階での英語にかかわる方も含めてできるだけ多くの学校英語教育に携わる方々に共有していただき、思いや意見を交流させ、まずはそれぞれができることから始めて、より良い方向へと進んでいきたいと考える。英語を教えるだけでなく、英語で何を教えるかが重要になってくる時代に、今回の研究が示唆的な取組事例の一つとなればと切に願う。

## 【参考文献等】

- 赤堀侃司 「 - 体験中心から目標中心へ - 学校の特色を生かす国際理解教育のカリキュラムづくりと実践のあり方」, 『IMETS 2001 No.141』, pp.52-55. IMETS 2001
- 安彦彦彦編 『新版 カリキュラム研究入門』 勤草書房 1999
- 伊藤嘉一 「 - 21 世紀の外国語教育に向けて - 小・中・高一貫の外国語学習のあり方」, 『IMETS 2001 No.141』, pp.56-59. IMETS 2001
- 金森 強編著 『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』 教育出版 2003
- 木村松雄 「4-4-4 制の提言：小学校英語を視野に」, 『The English Teachers' Magazine Oct. 2005 増刊号』, pp.60-66. 大修館書店 2005
- 笹島 茂 「『戦略構想』と(小・)中・高・大の連携」, 『桜美林シナジー 第2号』 桜美林大学大学院 2004
- 静岡県教育委員会 『静岡県版カリキュラム 英語科』 2005
- 静岡県総合教育センター 「平成 14 年度研究紀要第7号：小学校における英語学習活動に関する研究(教職研修部国際研修課)」 2003
- 諏訪部 真/望月昭彦/白畑知彦編著 『小学校から大学まで 英語の授業実践』 大修館書店 1997
- 田中茂範/アレン玉井光江/根岸雅史/吉田研作 「小中高一貫の英語教育をデザインするための枠組み」, 『The English Teachers' Magazine Oct. 2005 増刊号』, pp.67-72. 大修館書店 2005
- 田辺洋二 『これからの学校英語 - 現代の標準的な英語・現代の標準的な発音 -』 早稲田大学出版部 2003
- 寺島隆吉 「『英語教育を通じた国際理解教育』における評価」 岐阜大学教育学部英語教育講座 2003  
(<http://www.gifu-u.ac.jp/~terasima/article030429evaluation.htm>)
- 成田市立中台中学校区小・中学校 『成田市立中台中学校区小中学校連携英語学習 Gateway to English Language (GEL)研究紀要』 2005
- 樋口忠彦/金森 強/國方太司編 『これからの小学校英語教育 - 理論と実践 -』 研究社 2005
- 本間政雄/高橋 誠編著 『諸外国の教育改革 - 世界の教育の潮流を読む 主要6か国の最新動向 -』 ぎょうせい 2000
- 森住 衛 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想(行動計画) - その意義と問題点 -」, 『桜美林シナジー 第2号』 桜美林大学大学院 2004
- 文部省 「小学校学習指導要領」(平成 10 年 12 月、平成 15 年 12 月一部改正)
- 文部省 「中学校学習指導要領(平成 10 年 12 月)解説 - 外国語編 -」(平成 11 年 9 月)
- 文部省 「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」(平成 11 年 12 月)
- 文部科学省 「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」(平成 14 年 7 月 12 日) 2002
- 文部科学省 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」(平成 15 年 3 月 31 日) 2003
- 文部科学省 「初等中等教育における国際教育推進検討会報告 - 国際社会を生きる人材を育成するために -」(平成 17 年 8 月 3 日) 2005
- Richards, J.C. 2001. *Curriculum Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- White, R.V. 1988. *The ELT Curriculum, Design, Innovation and Management*. Oxford: Blackwell Publishing.
- (欧州) Council of Europe, Common European Framework of Reference for Languages  
([http://www.coe.int/T/E/Cultural\\_Co-operation/education/Languages/Language\\_Policy/Common\\_Framework\\_of\\_Reference/index.asp](http://www.coe.int/T/E/Cultural_Co-operation/education/Languages/Language_Policy/Common_Framework_of_Reference/index.asp))
- (英国) National Standards for Languages, National Language Standards  
(<http://www.cilt.org.uk/standards/standards.htm>)
- (米国) イリノイ州教育委員会 教育スタンダード (<http://isbe.state.il.us/ils/>)
- (同) 教育スタンダード(外国語) ([http://isbe.state.il.us/ils/foreign\\_languages/standards.htm](http://isbe.state.il.us/ils/foreign_languages/standards.htm))
- (米国) National Standards for Foreign Language Education  
(<http://www.actfl.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=3392>)

## 【研究組織】

	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
研究顧問	静岡大学教育学部教授 白畑 知彦	静岡大学教育学部教授 白畑 知彦	静岡大学教育学部教授 白畑 知彦
研究協力員	在籍なし	掛川市立和田岡小学校教頭 石山 せつ子 掛川市立桜が丘中学校教諭 片岡 徹 静岡県立掛川東高等学校教諭 浜浦 麻里子	掛川市立和田岡小学校教諭 竹下 敦子 掛川市立桜が丘中学校教諭 桑原 薫 静岡県立掛川東高等学校教諭 浜浦 麻里子 (~ 2005.6) 静岡県立掛川東高等学校教諭 片岡 徹 (2005.7 ~)



研究 担当 所員	教職研修部長 浮穴 學	参事兼研修研究部長 青野 馨	参事兼研修研究部長 中村 国男
	国際研修課長 中津川 隆久	カリキュラム開発課長 植松 豊	カリキュラム開発課長 植松 豊
	指導主事 鈴木 敬子	指導主事 大内 壯俊	指導主事 大内 壯俊
	ALT Dhamayanthi Sangarabalan (~ 2003.7)	指導主事 鈴木 敬子	指導主事 鈴木 敬子
	ALT Brian O'Brien (~ 2003.7)	ALT Sara Prowse (~ 2004.7)	ALT Kevin Frew
ALT Sara Prowse (2003.8~)	ALT Kevin Frew	ALT Johanna Hughson	
ALT Kevin Frew (2003.8~)	ALT Johanna Hughson (2004.8~)		

## 【研究顧問による特別寄稿】

### 「英語教育の異校種間連携の意義について」

静岡大学教育学部教授 白畑知彦

本論冒頭の研究の「目的」並びに「期間及び方法」に詳述されているが、本研究は、静岡県総合教育センター研修研究部カリキュラム開発課(外国語教育)が中心となり、3年の歳月をかけ取り組んできた小・中・高等学校の連携についてのまとめである。本研究紀要では紙幅の制限もあり、十分その意を伝えられない箇所もあるため、詳細については今後「あすなる」から発信される様々な情報をもとに研究成果の全体像をご覧いただきたい。

さて、われわれ研究同人は、首尾一貫して「小・中・高等学校における学校英語教育の連携の在り方とその一貫性」について討論し、その帰結に基づく実践を重ねてきた。その一部が本論にも紹介されているが、なぜ、一貫教育が必要なのであろうか。まず、学習の効率性を期待できよう。統一的シラバスに則って授業を構成することで、無駄を極力なくし、段階を追って学習を進められる。このことに加えて、教育内容の幅も広がる。

既に学習指導要領があるではないか、という反論もあろう。しかし、本研究で追求してきた「連携」や「一貫性」とは、学習指導要領の枠組みに基づきながらも、それを土台にした上での発展的一貫性なのである。すなわち、基礎・基本の上に成り立つ、国際理解教育的内容を色濃く反映した英語教育の実践という趣を呈している。ここで再度強調しておきたいことは、本研究の方向性は、英語教育でまず身に付けるべき「基礎・基本」を軽視しているのではないことである。それを踏まえた上での英語授業の在り方の、一つのモデルを追求したものと捉えていただきたい。

次のようなご意見もあろう。すなわち、「本研究の趣旨は分かる。しかし、実際問題として、教員の異動は頻繁に起こるし、異校種の先生とは話す機会も限られている。はたしてこのような現状で、小中高にわたる連携が可能かどうか疑問である。」

そこで、本論の表1で示されている「小・中・高を見通した「連携カリキュラム(試案)」が重要な意義を持つことになる。この試案は、『静岡県版カリキュラム英語科』でも提案したものである。この表に従って授業を展開していけば、どこの学校でも、どの教師が教えようとも、小中高にわたる長期間でも、生徒達は自然に一貫性を持った学びが可能になるのである。勿論、一年中実践することはないが、年に数度、このモデルに沿った授業実践は十分可能である。試案の使い方を熟読し、有意義に活用されることを期待したい。

最後となるが、3年間にわたる本研究は、総合教育センター外国語教育スタッフ並びに協力された先生方の多大なる献身なくしては成し遂げられるものではなかった。この場を借りて感謝の意を表したい。